

男子新体操に 恋してる！



(BOYS2010・下)

椎名桂子

～男子新体操聖地巡礼/青森山田高校①～

楽しくて、実り多かった盛岡訪問を終え、7月22日の早朝、私は盛岡駅を発ち、一路青森へと向った。とはいえ、なんせ青春18切符の旅！ 半日ばかりである。

折りしも22日は、青森県の甲子園予選準決勝の日、甲子園常連の青森山田高校も13時から試合だと言う。駅前で乗ったタクシーの運転手は、「今日は山田は全校応援のはず。新体操部も練習していないんじゃないの」と不吉なことを言う。少しばかり不安になりながら、青森山田高校につく。おお、これが青森山田！ ああ、おなじみの遠征バス！（まさか沖縄までは行かないよね？）そして、これが青森山田新体操部が練習している体育館だ！ うーむ、体育館からして気合い十分だなぁ。「気力迫力全力」ですからっ。

練習開始時間と聞いていた13時に少し遅れていた

ので、おずおずと体育館に入って行くと…いた！ 男子新体操部とおぼしき面々が。まだ練習は始まっていないようで、リラックスムードで思い思いにストレッチしたりしている。

「13時半から練習開始です。」と教えられ、勧められた椅子に座り、しみじみと体育館を眺める。男子のマット、女子のマットが敷かれ、残り半分スペースには器械体操の器具がひしめいている。マットをいちいち出すことなく、敷いておけるというのは恵まれた環境ではあるが、この体育館、決して「素晴らしい環境」とは言えない。天井も低く、徒手の団体はともかく手具の投げ受けをするには明らかに低すぎる。建物自体も古い。しかし、この古びた体育館で、あの最先端の演技が生まれているのだ。

よい環境かどうかはハードだけでは計れない。そう感じた。

図らずも、まだ監督も現れない生徒だけの様子を見きなり見ることができたが、ここ青森山田高校も



盛岡市立高校同様、なんだかのんびりしたムードだ。

2010年は、3月の高校選抜大会、5月の男子新体操団体選手権(ユースチャンピオンシップ同時開催)と2連勝している青森山田高校。考えてみれば、インターハイでも優勝すれば3冠だ。国体がなくなった今、「選抜大会+団体選手権+インターハイ」が高校三冠と言える。現在の青森山田高校は限りなく三冠に近いところにいるわけで、さぞかしピリピリした雰囲気インターハイ優勝に向かっているのかと思っていたのだが…。

13時半すこし前になって、荒川監督が現れた。「今日は、野球応援があるんですが、レギュラーメンバーだけは、練習させてもらうことにしました。ほかの子達は、野球に行ってます」

どおりで、ユースチャンピオンシップで見かけた青森山田軍団よりもずい分、さびしい人数だな、と感じたわけだ。「練習時間も今日は短いですが、なんとか通しまでもって行く予定です」と荒川監督。

13時半ぴったり、監督の前に選手達が並び、挨拶をして練習開始。盛岡でも見た、「タンブリングなしの分習」から始まる。至近距離から見ると、青森山田の演技。それも今年の演技は(いや、「も」か!)演技序盤の動き、表情が抜群にかっこいい。最初のポーズから、近くで見るとドキドキしてしまう。前にしっかり視線の向くことが多い序盤の演技は、近くから見ると目の保養を通り越して、目の毒なほどだ。16~18歳の男の子達なのだが、そのセクシュアルな魅力にくらっときてしまう。ヤバイ、青森山田、かっこよすぎるぞ!



と、見慣れない人間の目には、「すばらしい、カッコいい！」と見える演技でも、当然監督からは直しが入る。しかし、驚くのはその修正点の細かさだ。どこが違うとも言い切れないほどの小さな違いを、監督が指摘する。この細かさは、盛岡で見た練習にはなかったように思う。いや、それどころか今まで多くの女子新体操の練習も見てきたが、ここまで細かい動きにこだわった練習をしているクラブはあまりなかったように思う。「今は、どこのチームも動きで勝負してくる。おれ達は、動きに深みが出るところまでできなければ、差はつかないんだ！」と荒川監督の檄が飛んだ。



たしかに。

2007年の青森山田の演技は、絶対無二のものだった。評価は分かれるにせよ、ほかのどこもやっていない動き(ダンス的な動き)を、青森山田が最初に取り入れ、度肝をぬいた。それは間違いのない。2008年、2009年もその流れのまま、常に優勝してきたわけではないが、「流れるような動きの男子新体操」では他の追随を許さない青森山田高校を確立してきた、と思う。



しかし、今年は、はじめは「山田のパクリ？」と言われたチームも、自分達なりにダンス的な動きを消化し、取り入れることに成功し始めている。また、山田とはひと味違った斬新な動きを取り入れるチーム(埼玉栄など)も出現してきた。たとえ順位がどうであれ、やっぱり、動きの美しさは青森山田が一番！という優位も、去年までほど絶対的ではなくなっている。

だからこそ。

この細かい修正なのだと思う。

ダイナミックなタンブリングや組み技に目を奪われがちな男子の団体において、こういった動きの精度の差は、ほんの小さな違いにすぎない。しかし、その小さな違いにこだわる。それが、青森山田のスタイルなのだ。

ただ立っているだけ、ただ歩いているだけの姿さえも絵になるように。

そんなこだわりが隅々までいきわたるこの演技は、やはり青森山田独特のものだ。



私の目には、同じように「うまい！」と見える選手たちの中に、監督は目ざとく「おまえのがいい！」と動きのいい選手、形のいい選手を見つける。その言葉を、他の選手もしっかり聞いている。そして、違っている選手は直そうとして、やってみる、動いてみる。

その繰り返しだ。

約1時間で休憩に入った。休憩中はみんな、大丈夫かと思うほど、だらけて休む。オンオフの切り替えが実にうまい。

14時10分からの5分間、タンブリングのみの練習を行う。盛岡でも見たあれだ。交差しながら、どんどん四方から選手がタンブリングをする。よくぶつからない、と感心する。

14時15分からの30分弱で、タンブリング入りの分習。ここでは、1つのフレーズにつき多くても2回くらい抑えるだけで、とんとんと進む。徒手の緻密さと、表情の豊かさを中心に、監督から指摘が飛ぶが、厳しく叱咤するようなことはほとんどない。

翌週からの盛岡での合宿と、合宿前の長い練習では、もっともっと厳しいつめた練習をするぞ、と釘をさされていたが、今はとにかく全体を通してやってみる、そういう練習だったようだ。



休憩をはさんで、予告どおり「通し練習」に入った。タンブリングも入れた、本当の通しだ。

この通しの前の休憩中に、選手達は、いちばん涼しい風の通る場所で円になって休んでいたが、そのうち誰からともなく集まってきて、ミーティングを始めた。リーダーの阿部信宏(3年)が、中心になりその日の練習で注意されたことや、前日までの練習での注意点などを確認していた。女子

とは違って、男子新体操は、1日に何本も通しはやらない。全通しはやらない日もある、という(たしかに盛岡ではハーフの通ししか見られなかった)。だからこそ、「今日は通すぞ」と言われたからには、現時点での最高の通しがしたい、そして、さらにそこから向上していくための、助言を彼らはほしいのだからと感じた。いい通しができなければ、結局、ダメなところを指摘されて終わってしまう。だから、ムダな通しにならないように、あくまでも自発的に彼らは、通しに向けての気持ちを高めていっていた。しっかり涼風は確保しながら、体はぐっとリラックスしながら、であるが。

このミーティングを見るまでもなく、練習中から阿部のリーダーシップは目立っていた。体も大きく、先輩らしい風格もある阿部だが、じつにいいタイミングで仲間に声をかける。ときには厳しく、ときには励ますように。「ここは、昨日たくさん確認したところだからムダにしないように決めよう！」彼のそういう言葉は、強烈な説得力をもっている。ワールドカップ日本代表を例に挙げるまでもなく、よいチームには、よいリーダーがいる。阿部はその役割を十分に果たしていると言えるだろう。

1本きりの通しは、細かい部分でミスはあったが、悪くないできれば私には見えた。練習開始から1時間15分でここまでもってこれる力は、やはり相当なものだ。至近距離で見る青森山田高校の演技は、やはりすばらしく、男子新体操という枠を超えた志が感じられる。

それでも、「今のだと18.6で、負けるな。練習では19.1くらいまでやれないと勝てない。」と監督は言う。たしかに、それくらい今の男子新体操は全体がレベルアップしてきている。青森山田といえども簡単には勝てない。それが現実だ。

「インハイで勝てば三冠！」などという驕った気持ちは、今の青森山田からはまったく感じられない。どうすれば勝てるだろうか。どうすれば自分達の演技で見る人を圧倒できるだろうかと必死で試行錯誤しているように見えた。

自信がないわけではないだろうが、安心も楽観もしていない。だから、少しでも前進しようと、蟻の穴を埋めるような作業を地道に行っていた。

～男子新体操聖地巡礼/青森山田高校②～

写真を撮るのは得意ではないので、かなり残念なものしか撮れていないが、それでも、ないよりは少しでも青森山田の演技の魅力を伝えることができるかと思うので、今回は、写真の解説などしてみたい。

→ これは、おなじみのバランスに入る直前の動き。ここは、選手全員の視線がキッと前を向いているのがとてもいい。とくにセンターにいる平野泰信(1年)の表情がなんとも凛々しい！





←これもおなじみの上体の回旋運動だが、体の片側の伸びがとて面白い。話題の「歩く」場面でも、思い切り体を片方に伸ばす(それも揃って)ところがあるが、その伸びの美しさにはほれぼれしてしまう。

→ ラストポーズ。中心にいる谷俊太郎(3年)の視線が強い。射られるようだ。さらに腕の形もなんとも力強くて谷の真骨頂が発揮されている。一番前の阿部の視線もよいのだが、この写真では突っ込みすぎていて見えない(残念！)。



↑ 絶対に無理！ と思っていたタンブリング中の写真が、なんとか撮れた2枚。伸身の姿勢がさすがに美しい。バラバラに動いているように見えるパートも多い青森山田の演技での、同調性の見せ場はやはり「3バック」！ かなり入念に練習していた。

→ 監督からの指導を受けている最中はみんなもちろん真剣だが、ちゃんと笑いもある。監督が笑えるようなことを言うことも多く、おもしろいことを言われればみんな屈託なく笑う。想像よりもずっと穏やかな雰囲気練習が進んでいた。



→ 1日目の練習終了時の写真。野球応援に行っていたメンバーも合流している。野球応援の子達がきちんと体操服を着ているのがかわいい。フロアマットに向かって挨拶している。



では、ここでインターハイに出場するメンバー(予定)を紹介しておこう。

●前田優樹(2年)

柔軟性あり、タンプリング強い、表現力も抜群！ の頼もしい2年生。東北大会では、なんと個人でも優勝している。ユースチャンピオンシップでも、意外性のある手具扱いや動きをしていて目を引いた選手だ。体が柔らかいのは生まれつき？ と聞いてみると「普通の人よりは柔らかいほうだったかもしれませんが、今みたいに柔らかくなったのは中学のときに遊びでも柔軟をしていたから」という答えが返ってきた。遊びでも柔軟！ それだけ新体操にのめりこんだ中学時代だったのだろう。胸を反らした姿勢がとても美しいので、胸や腰がすごく柔らかいんだね、と言ったところ、「いえ、柔らかくないです。胸が前に出て見える余分なでっぱりが肋骨のところにあるんでそう見えるだけです。おかげで得しま



す」といたずらっこのような笑顔で秘密を明かしてくれた。来年の青森インターハイでは、おそらく個人でも活躍を見せてくれるのではないだろうか。期待したい。

●阿部信宏(3年)

仲間からも監督からも信頼の厚い団体リーダー。演技中はメガネはかけていないが、メガネをかけると一段としっかり者に見える。体型も顔立ちも男らしく、長身を生かした演技は雄大さを感じられる。彼が新体操を続けているのは「みんなといっしょに頑張れるのがいいから」だと言う。なんともリーダー気質を感じさせる言葉ではないか。出身は青森県の白銀中学。小さいころから強豪・青森山田高校を見てきているので、そこで新体操をやることの厳しさは覚悟して入学してきたという。「いつかはレギュラーに」という願いがかない、高2のインターハイ前から団体メンバーに。高1のころから、練習にもダンスが取り入れられ、ダンス的な要素が求められるようになってきたとき、正直「自分には無理」と思っていたというシャイガイ。しかし、もともと「男子新体操はカッコいいスポーツなんだ」という思いがあったため、自分だけがカッコ悪いままでたまるか！と奮起してダンスも頑張ってきたそうだ。しっかりしたリーダーぶりをほめると、「自分ではとくにリーダーシップがあるほうという自覚はないです。先輩たちから受け継いできたものだから」という言葉が返ってきた。インターハイでは優勝を目指しているけれど、それ以上に観客を感動させたいという思いが強いのだそうだ。これも、おそらく先輩たちから受け継いできた青森山田スピリットなのだろう。



●古谷壱成(2年)

春の選抜大会では補欠だったが、5月の団体選手権では、メンバーの怪我のため、直前でメンバー入り。そして、その大役を見事に果たして、監督や仲間の信頼を獲得し、現在はメンバーに定着している。さらに、ラストの大技では、もっとも高く跳ぶ役回りを務める。線が細く、一見軟弱そうに見えるが根性は人一倍！私が取材にお邪魔したときに、いきなり私の前に立って「お願いします」と言ってきたのが彼。その積極性もすばらしい。メンバー入りしたのが遅い分、監督や仲間から違いを指摘されることも多いが、まったくへたれることなく常に前向きに何回でもやり直す。動きのセンスはなかなかのもので、ちょっとした腕の形や、膝の使い方、表情のつけ方など、いいアクセントをつけることができ、



鹿倒立に入る前のポーズと表情は最高だ！ 今が伸び盛りと監督からの評価も高く、これからが楽しみな選手だ。

●大久保俊樹(3年)

選抜大会には出場していたが、団体選手権には、故障で出場できなかった。代わりに入った古谷の成長と、自身が故障明けだったこともあり、レギュラー落ちの危機もあったが、持ち前のまじめさで再浮上してきた。取材時も、補欠の鈴木仁(2年)が常に、大久保と同じ動きを練習していて、常に人と競ってポジションを守り続けるプレッシャーはいかほどかと思うが、とにかくひたむきな練習ぶりが目についた。



当落線上は誰だってつらい。つらいからこそ、頑張らなければいけないのだが、そのつらさゆえに逃げに入ってしまう場合もある。が、彼はそうではない。非常におとなしそうに見える選手だが、秘めた気持ちはとても強いのだろう。今、彼は一度は失いかけたポジションに必死にしがみついている。その「必死さ」がおそらく彼の最大の武器だ。インターハイで、彼の強い思いが実ることを祈らずにはいられない。

●谷 俊太郎(3年)

情感たっぷりの表情と動きが目を引く選手。大柄な体をいかしたダイナミックな宙返りや、伸身のひねりは、豪快かつ美しい。がたいがいいので、体が硬そうに見えるが、じつは柔軟性にも恵まれていて、上体の蛇動のなめらかさは、ユースチャンピオンシップでも印象に残った。今回の団体演技では、センターポジションも多く、作品の空気を左右する重大な役割を負っている。昨年までの青森山田の流麗な演技とは違って、今年の作品は「かっこよさ・力強さ」が目立つがそれは谷の存在感に負う部分も大きいように思う。大人びた雰囲気をもった選手なので、大学生になってからもぜひ新体操を続けてほしい。



●平野泰信(1年)

「1年生が青森山田の団体メンバーに入ることはめったにない」そうだが、久々に1年生メンバーとなったのがこの平野だ。たしかに昨年の全日本ジュニアでも目立っていた。ユースチャンピオンシップでも、個人で入賞。スーパールーキーぶりを見せつけた。彼の魅力は線の美しさ、雰囲気の

ある動きだろう。じつは柔軟性はそれほどあるほうではなく、ストレッチを見ると苦労している面もある。欠点のない選手、ではないのだ。しかし、いざ動き始めると、すべてが柔らかいように見えてしまう。なめらかに動く、空気を動かす、という力が備わっている選手なのだ。団体メンバー入りしてまだ日が浅いため、とにかく必死についていっているところも見える。しかし、一方で彼の存在がこの作品に、新しい魅力を吹き込んでいることも間違いない。練習が終わったあとの姿を見ていると、まだまだ1年生らしい無邪気さもあり、かわいらしい印象だが、練習中の真摯な姿勢には、感心するばかりだ。だからこそ、監督からも先輩達からも期待されているだけでなく、かわいがられてる感じが伝わってきた。スーパーキーにありがちな傲慢さはみじんもない。能力以上にその素直さが、彼の最大の魅力だろう。



●籠島 遼(3年)

まったりしたポーズで写っているが、今年の青森山田高校のキャプテンだ。取材時にはちょうど足の故障でほとんど練習ができない状態だった。インターハイへの個人での出場も決まっており、休んでいる場合ではないのだろうが、だからこそ無理もできないという苦しい状況だったようだ。自分が動けないため、団体の曲かけや、サポートに徹して大きな声で仲間を叱咤激励していた。常に穏やかな笑顔で、チームの雰囲気や和らげる、癒し系キャプテンに見えた。しかし、今回見ることはできなかったが、演技は非常に大人っぽく、身体能力も手具操作能力も高い。インターハイまでにはしっかり故障を治して、沖縄では会心の演技を見せてほしい。



紹介した7人のうち、青森出身は3人だけだ。あとは愛知出身が3人、福島出身が1人。しかし、たとえ青森出身でも、青森山田高校の新体操部は全員が入寮することになっているため、親元は離れている。そのため、地元の子ばかりの盛岡市立高校とはまた違った一体感がここにはある。2007年(現在の高3が中3の年)の全日本ジュニアのプログラムを確認してみたところ、この7人全員の名前を見つけることができた。全員が全日本ジュニアを経験している。それだけの面子が集まってくるところは、青森山田の強さだろう。

ただ、いかんせん青森だ。愛知県から来るにはあまりにも遠い。それでも、多くの選手達が青森山田に進学してくる。それだけ、「青森山田の演技」に吸引力があるということだ。生まれも育ちもバラバラな彼らだが、話してみても感じるのは、「青森山田で新体操をやる」ということに対する強い

あこがれと覚悟だ。だから、彼らにとって青森は遠くではなく、寮生活への躊躇もなかったのだろう。手元から放す親のほうはきっとハラハラし、さびしい思いをしたかもしれないが、きっと彼らは、胸いっぱいの期待と希望をもって「ここ」に集ってきたのだ。

3年間の中では、「こんなはずではなかった」と思うことだって、必ずある。それでも、自分がここを選んだのだから、と思えればきっと踏ん張れる。その踏ん張る力を、青森山田高校が彼らに与えている。

～男子新体操聖地巡礼/青森山田高校③～

7月23日、青森山田高校新体操部では、朝9時から練習が始まった。しかし、そこに荒川栄監督の姿はない。1年生の榊原勝己くんの「はじまります！」という元気なかけ声で、練習が始まったが、指揮をとっていたのは、男子新体操界では異色の女性指導者・直美コーチだった。部員達はフロアマット上に広がり、直美コーチの指導のもと念入りなストレッチを行う。

このストレッチが、なかなか衝撃的だった。いや、正直に言うと、女子の新体操やダンス、バレエなどのレッスンを思い起こせば、それほど目新しいことをしているわけではない。極めてベーシックなストレッチだと思う。

が、もしかしたら、男子に関してはここまでの本格的なストレッチをやっているところはあまりないのかもしれない、と感じたのだ。

かつて「男子新体操？」と思っていたころ、男子新体操でもっとも改善の余地があるように見えていたのが、脚・足先のトレーニングだった。いわゆるバレエレッスンでもいい。とにかくきちんとつま先を伸ばせて、O脚や内股じゃない男子選手を育てることができれば、男子新体操はもっともっとステキに見えるんじゃないかな、と思っていたものだ(つまり、当時は、脚の欠点が目立つ選手が多かったということだ)。

近年は、青森山田高校をはじめ、井原精研高校や神埼清明高校など、脚のラインの美しいチームも増えてきた。それらの学校やクラブではおそらくバレエなどのレッスンを取り入れているのだろうなあ、と感じていたが、青森山田高校では、まず、ストレッチが極めて本格的だった。

「青森山田に入ったのだからかっこよく動きたい」「人に感動を与える演技をしたい」…部員の誰もがそういう強い思いをもっていることは、前日の練習でもよくわかった。しかし、思いだけで体は動かない。かっこよく動きたいなら、そう動ける体をまず作らなければ。

部員みんなに、その考え方が浸透しているのだろう。彼らは、ごくごくまじめに一生懸命にストレッチに取り組んでいた。高校に進学するまでやったことがない、という子にはかなり厳しい内容だろうと思うが、少しでも、直美コーチの動きに近づけるよう、ひたむきに頑張っていた。これが、他校とは一線を画すると称される、「青森山田の動き」の根源なのだ、と私は感じた。

では、青森山田高校のストレッチの様子の写真に、解説をつけていこう。



← まずは、体を床にしっかりつけてリラックス。
体をひねっているところ。

→ 男子としてはかなり柔らかい子も。ぺったり
お腹が前についているこの左右開脚はご立
派。



← 前田優樹君(2年)の左右開脚中のつま先。
女子の感覚で言えば、あと一歩甲が伸びて、カ
ーブが出るとよいが、かなり伸びているほうだと思
う。

→ これは、谷俊太郎君(3年)のルルベ。もう
少し、甲が前に出れば美しさ倍増だが、キープ力
はかなりのもの。



→ これも前田優樹君。彼はかなり柔軟性に優れている。



← 甲出しもしっかり組み込まれている。
これには驚き！

→ この写真で前から3番目に写っているひとときわ前に体を倒しているのは石橋龍馬君(3年)。彼はとにかく体が柔らかい。アグレッシブなストレッチへの取り組み方が目を引いた。



← この見事なスプリットも石橋君。前後に開脚したあとに、体を前に倒してべったり床につけるのだが、楽々やれていた。

→ V字バランスをしながら、脚を開閉する。これがやり慣れていない人にはなかなか難しい。ひっくり返っているのは誰だ？



← アキレス腱伸ばしもしっかり。

→ 直美コーチの腰のおとし方が素晴らしい！しかし、部員のみんなもかなりいい感じに股関節が開けている。30分近くかけてじっくりストレッチしたあとだと、ここまで体が開くのだ。



直美コーチのレッスントイムの締めくくりは、ダンス！この写真だと、なんだか不恰好に見えてしまっても申し訳ないのだが、ほんとはもっとかっこいい！ただ、このようにあえて背中を丸めてみたり、腰をぐっと落としたりするので、一瞬を切り取ってしまうと…ちょっと残念な写真になってしまう。

でも、こうやってノリのよい曲で、体を小刻みに動かす練習もしっかり取り入れていることが、青森山田の強みにつながっているに違いない。

また、新体操は、ぴしときちとキメたときの形はたいていの選手が美しいのだが、差がつくのは「抜き方」だと思うのだ。これは男子でも女子でも。最高に神経を使って、体の隅々までをぴーんと伸ばしたときではなく、動きの中で、一瞬脱力を見せる瞬間、そこがサマになると「ほかの人とは違う味」が出るし、抜きんでることができる。そう思う。

従来の新体操ではなかなかやらない、このダンスの動きに、彼らは照れることなく取り組んでいる。ここに青森山田高校のあの演技の秘密があるのかもしれない。



～男子新体操聖地巡礼/青森山田高校④～

青森山田高校の練習を2日間見て、いちばん強く感じたのは、多くの人の「青森山田の新体操」に対する思いが、結集しての現在がある、ということだった。

団体メンバーはもちろんのこと、補欠もマネージャーも、同じ熱をもってチームの一員として動いている。

指導陣も同じだ。

監督は荒川栄だが、私が見学させてもらった23日の練習には総監督の尾坂氏も現れた。直美コーチもストレッチに始まり、練習後の部員達の自主練にもずっとつき合っていた。教師という仕事をもちながらの指導は、常に新体操最優先というわけにはいかないときもある。だが、誰かが欠けても誰かがその穴を埋めようとする、指導チームとしての補完ができているのは強い。

荒川栄監督は、著書の出版のほか様々な活躍の場を広げていることで知られているが、そうやって積極的に出ていけるのは、「青森山田」という伝統あるチームを、自分ひとりで抱え込んでいるわけではないから、なのだと感じた。

どんなカリスマ指導者でも、スーパーマンではない。与えられた時間は誰だって平等に1日24時間だ。すべてを自分でやらなくても、できなくても、頼れる人がいればよいのだと思う。頼れる人がいることに感謝できる人の元には、頼るに値する人が現れるものだから。





上の写真は、23日の練習風景だ。しっかり40分かけてストレッチとダンスレッスンを行ったあと、荒川監督も現れ、分習に入ったが、フロア内で演技をしているメンバーの後ろで補欠のメンバーがしっかり動いているのがわかるだろうか。

少し遅れて、尾坂総監督が登場してからは、直美コーチも入れて3人体制で動きをチェック。誰かが「そこがなにかおかしい」「なんとなくしまりが無い」と指摘すれば、誰かが「もっとこうしたら」「少し腕の位置が違うんじゃない」と改善策を提示する。指摘されたとおりに、選手たちも積極的に動く。レギュラーメンバーだけでなく、補欠も、いや補欠登録はされていないだろう部員までも、指導陣の言うことをしっかり聞いていて、動く。

青森山田新体操部は、14名。指導陣がこの日は3名。17人が一体となって、この演技を、「青森山田の演技」を磨き上げている。そんな熱気がたしかにそこにはあった。



荒川栄の恩師でもあり、青森山田高校の輝かしい実績を築きあげてきた尾坂総監督のいる練習は、さすがにぴりりとした空気がある。しかし、その一方で、きつい東北訛りのしゃべりが、なんともあたたかみのある空気をもし出し、厳しい指摘をする次の瞬間、部員も指導陣も笑いに包まれる、そんな練習風景だった。「種子島(→籠島遼のこと)」「ふたっつ(→平野泰新のこと)」など、

独特なセンスで選手達にニックネームをつけ、さも当然のようにその名で呼ぶ。本人も苦笑いしつつ、どことなく嬉しそうだ。そんな人徳が、この尾坂総監督のカリスマ性なのだろうと思う。



3人がかりで指導できることは、さすがにそうたびたびはないそうだ。それだけに、この機会に、気になるところは徹底して、修正する。荒川監督も立ち上がり、選手の体に直接触れての熱血指導だ。監督が1人の選手にかかりきりになっていても、尾坂総監督や直美コーチがほかの選手にも目を配り、声をかけ、アドバイスしている。誰も時間を無駄にしていない。3人体制という贅沢な時間を、有効に使おうとみんなが思っているのだ。



補欠の鈴木仁(高2)は、5月の団体選手権のときは、メンバーに入っていた。ユースチャンピオンシップには個人でも出場し、上々の成績もあげている。神経のいき届いた動きで、目力もあり、とてもいい選手だ。しかし、インターハイ予選、東北大会で、気持ちの弱さが出てしまい、ミスが続いてしまったのだと言う。私が、青森を訪ねたとき、鈴木仁は補欠として、必死に自分と戦っていた。団体メンバーがタンプリング入りの練習をするとき、鈴木は、途中でフロア内にマットを入れる役割をしていた。必要なときに素早くマットを出し、すぐに引っ込める。神経も体力も使う仕事だ。22日の練習後には、団体演技を1人で通すという練習も行っていた。それもただ通すのではなく、団体メンバーに見てもらいながら通すのだ。これはとても勉強にはなるだろうが、すさまじいプレッシャーだろうと思う。それでも、今、彼はやるしかない！のだ。

鈴木が1人で演技を通し終わったあと、正面でそれを見ていた団体メンバーが1人ずつコメントする。3年生からは厳しいコメントもかなりあった。「メンバーからはずれてからあきらめているように見える」とはっきり言うメンバーもいた。1年生の平野も、先輩に対する気遣いは見せながらも、「もう少しこういうところに気をつけたらいいと思う」ときちんと指摘していた。

「けっこうみんな厳しいことも言っていたけど、言いにくい？」と聞いたとき、彼らは「それが本人のためだし、チームのためだから」と答えた。

言われるほうは悔しくないはずはない、と思う。

だけど、こうやって、今、メンバーではない選手が育っていくのだ。みんなの気持ちは、きっと鈴木にも伝わっている。



鈴木だけでなく、青森山田高校のサブメンバー達は、本当によく頑張る。もちろん、チームのためであり、いつかは自分がレギュラーになるため、だろう。だが、それだけではない。とにかく「新体操が好き！」という熱い気持ちが伝わってくる。

それがもっともよく見えるのが榊原勝己(高1)だ。榊原は、愛知県から青森山田高校に進学してきているが、愛知では有名な半田中出身ではない。そのため、全日本ジュニアなどの出場経験はない。さらに、彼は極端に身長が低く小柄だ。申し訳ないがとても高校生には見えない。ところが、その小さな体でひとたび踊り始めると、驚くほどの存在感がある。

今年のユースチャンピオンシップにも出ていたが、私のメモには「間合いのよさ、キメのポーズの美しさ、自然な動きで、音楽に調和している。ロープはフラメンコギターの音楽がよく表現できていた」とある。小柄なことにはあまり触れていない。おそらく演技を見て、あまりにも雰囲気のある動きをするので、小ささが気にならなかったのだろう。

22日の自主練タイム。野球応援で疲れて帰ってきているはずなのに、彼は、楽しそうに何度も踊っていた。団体の振りや別の曲で、その曲のイメージに合わせて踊る、などという遊びのような、でもとても意味のある練習を、前田優樹や平野泰新らといっしょにしきりにやっていた。

彼は、踊ることが、新体操が大好きなのだ。もちろんそれは他の部員達にも共通していることなのだが。団体のレギュラーがメインの練習中、サブメンバー達は、見事な分業で、ビデオ撮影やレギュラーへの水分補給、マットの出し入れなどを行う。手が空いていれば、フロア外で動く、または指導者にも劣らぬ厳しい目で演技を見つめる。すべては、チームのため。そして、新体操が好きだから。



そんなサブメンバー達に、練習後、荒川監督から檄が飛んだ。「お前はそんなだったら一生補欠だ。それが似合ってる」などというきついセリフも飛び出していた。ただ、それは、きっとなんとか這い上がってきてほしいから、だろう。「青森山田で新体操をやりたい！」という強い思いでここまで来た生徒達が、伸びきれずに終わっていいとは、指導者は思っていないはずだ。だからこそ、伸び悩んでいる子には、なぜダメなのか、どこがダメなのか、厳しい指摘もする。反骨心をあおるために、きつい言い方をすることもある。しかし、それはおそらく「伸びてほしい」という思いからだ。



↑ 今年の青森山田高校の団体レギュラーには入っていない、スーパーサブ達(石橋龍馬、吉田豊、平岡健士、服部心、鈴木仁、榊原勝己、前田夏樹)+キャプテン(籠島遼)。集合写真を撮影したあと、「青森山田らしいカッコいいポーズで」と注文つけたのが右の写真だ。

～男子新体操聖地巡礼/青森山田高校⑤～

更新が滞っている間に、インターハイが開幕してしまいました。今日はもう団体競技の日、数時間後には、今年のインターハイ団体優勝チームが決まっています。

ドキドキしますね。

私も、今回、直前に盛岡と青森に行ってきたため、その両校の応援をしているのはもちろんですが、この2校を見て改めて感じた「男子新体操のよさ」は、おそらくほかの高校にも多かれ少なかれ共通しているのではないと思うだけに、本当にどこにも頑張ってもらいたいです。「優勝」という結果がつけばそれに越したことはないでしょうが、優勝はしょせん1校。そうじゃなくても、自分達のやってきたことがすべて出せた！ そんな思いでインターハイの演技を終えることができればいいな、と祈らずにはいられません。

さて。

あと、数時間で演技が始まってしまう青森山田高校ですが、今回が最終回です。

今回は、とにかく写真たっぷりでいきましょう！

青森山田高校の練習を見ていて、いちばん驚いたのは、サブメンバーがものすごく練習に参加しているということだった。

曲かけや、タイムキーパーやビデオ係、そういうサポートの仕事ばかりでなく、サブメンバーのみんなが、体を動かし、演技をし、監督やコーチからの注意をしっかり聞いている。

そのことにとっても感動し、そして、驚いてしまった。

大久保の直前の怪我で、急遽、選抜大会とは違うメンバーで挑んだ団体選手権でも優勝できた青森山田、そしてインターハイではさらに団体選手権ともメンバーが代わっている。それができるのは、こういう「全員練習」をしているから、なのだ。

今まで、女子ではたくさんのチームを見てきたが、こういう練習の仕方をしていたチームは少なかったように思う。もちろん、チームによる差はあるが、女子において「レギュラー」と「その他の人」との壁はもっと高い、いや、あえて高くしている場合が多いように感じるのだ。



いわく、「悔しい思いをさせて、早くレギュラーになりたいと願うことで伸びる」それを期待しているのかもしれないが。

極端に言えば、指導を受けたければレギュラーになれ！ そんな雰囲気練習してはいないだろうか。補欠だからこそ、レギュラー以上に必死に練習してうまくなりたいとは思っても、その「練習する時間も場所もなければ、誰も見てくれない」そんな状況にあることが多くないだろうか。



ここには、そんな空気はみじんもなかった。まさに、「補欠だからこそ、レギュラーじゃないからこそ、人一倍食欲にうまくなろうとしている」ことを、態度で示すことができる、そんな環境があったのだ。

これらの写真は、集団演技の練習をしているわけではない。団体の分習を行っているのだ。レギュラーメンバーが演技をして、監督から注意を受けている。そのときに、フロアマットの上に、サブメンバ

ーがどんどん入ってきて、注意を聞いている。動いて見せている。

「レギュラーじゃないくせに、なんでそんな前にいるんだよ」なんて言われなかな、と見ていて心配になるくらい、誰よりも前で監督の話を聞こうとしているのが榊原勝己(高1)だ。

そして、榊原は言われたことをすぐにやってみる。「こうですか？」と言わんばかりに前でそれをやる。

レギュラーメンバーではないのに。



女子のチームに、こんな子がいたらどうだろう。微妙な空気にならないだろうか。

もちろん、指導者はそれを歓迎するだろう。「なんてやる気のある子なんだ」と評価するかもしれない。だけど、生徒達は受け入れるだろうか。なかなか難しいような気がする。

指導者だって、その「やる気」を評価する人ばかりではないだろう。「補欠としてまずやるべきことはま



ずは選手のサポートだ」と言う人もいるんじゃないだろうか。

サブメンバー達の積極的な練習ぶりに驚く私に、「ああやって練習にどんどん参加しないと成長しませんから。あれでいいですよ。あれがうちの普通です」と直美コーチが言った。

女子の新体操も経験している直美コーチには、私の驚きが理解してもらえたようだ。「たしかに女子とはちょっと雰囲気違うかも」と、直美コーチは笑った。

女子の指導者も、「みんなでうまくなろう」「みんなで上がっていこう」とはよく唱える。だが、そのためにどういう練習の仕方をして、どういう雰囲気を作っていくかが違うのではないか。

青森山田で見た練習風景には、その「みんなでうまくなる」ためのエッセンスが詰まっていたように思う。この環境で、「自分は補欠だから、見てもらってないだから、うまくなれない」と言う人がいたら、それは甘えじゃないかとも思う。

レギュラーにならない限り、まともに「練習」できない環境にいる子だって他のチームにはたくさんいる。それに比べたら、たとえ自分がメインではなくても、サポートの仕事はたくさんあるとしても、これだけ「参加できる練習」があるのならば、どんなポジションにいても、向上しないわけではない。





この日、団体のレギュラーメンバーに入っていた6人の中で、3年生は3人だ(阿部、谷、大久保)。インターハイ後、またはオールジャパン後には彼らは引退する。6人のうちの半分がいなくなるというのは、大きな穴に違いない。が、その穴はきっとほどなく埋まるだろう。

もちろん、力の差はすぐには埋まらないかもしれないが、レギュラーと同じ熱さで、同じ濃度で、こうしてともに練習してきたサブメンバーがこんなにいるのだから。今いるメンバーとはまた違う個性のチームにはなるだろう。

大柄な阿部と谷が抜ければ、少し線は細くなるかもしれないが、そうなったらなったで、よりスタイリッシュな演技にもなるだろうし、小柄な榊原などを使って「高く跳ぶ」演技を見せてくれるかもしれない。青森山田の演技はいつもカッコいいし、いつも強い。

だけど、「いつも同じ」ではない。メンバーによって、その色や味つけは変わっているし、それができるのはレギュラーになる以前から、こうしてメンバーそれぞれの個性を見ているからに違いない。

青森山田ほどの強豪校であれば、どんなに厳しい練習をしているのだろう、と思っていた。どんなにきつい競争があるのだろうと思っていた。

たしかに厳しい言葉がとぶ瞬間もあった。チームメイト同士でも、厳しく指摘し合う姿にうなったこともあった。





だが、そこにあったのは、「競争」という空気ではなかった。

いや、もちろん競い合っはいるのだが、競わせてはいるのだが。

でも、それ以上に彼らは「仲間」なのだと感じた。

仲間だから、レギュラーだろうが、そうじゃなかろうが

みんなが向上することを、指導陣はもちろん、本人達も望んでいる。

自分達が卒業した後、または自分が怪我をしてしまったとき、自分の穴を埋めるのは、後輩達やサブメンバー達なのだから。

「青森山田」の伝統を、このチームを、守っていくのは誰でもない、自分達だということを彼らはよくわかっているのだ。



「うまくなりたい」…だから頑張る！

そんな原風景を青森山田高校で見つけることができた。

青森まで来てよかった！

練習おわりの挨拶をする、凛々しい彼らの後ろ姿を見ながら、心からそう思った。

2010 美ら島沖縄総体① 高校総体男子個人競技レポート

大変長らくお待たせしました。

開催地が沖縄とあまりに遠かったため、私は行くことができなかった高校総体！ その美ら島・沖縄での熱戦の様子を、おなじみの特派員・Aさんから取材してきました。

本当にすばらしくレベルの高い、熱い闘いだったようです。

インターハイの話を始めると、今だ興奮冷めやらぬ様子だったAさんのレポートをお楽しみください。

男子個人のトップで登場したのは**斉藤剛大(県立袖ヶ浦高校)**、春の選抜大会優勝者である。すらりとした長身で、素直そうな動きが好印象な選手だが、1種目目のクラブで、圧倒的に速いシェネを見せていきなり9.400をマーク。結果的にはこの得点がクラブではこの大会の最高得点となった。スティックでは、なにげないポーズながらも入りのポーズがとても美しい。腕の長さが生かされている。ころがしてポロリとこぼしたところがあったのは残念だったが、まったく違う曲調で2種目を演じ、それぞれに踊りこなせているところに、センスが感じられた。

宮前凌(恵庭南高校)は、ユースチャンピオンシップでも見た選手だが、ユースのときよりかなり安定してきている。が、いかんせん1年生。まだこなれていない部分も見受けられたが、クラブの演技は力強く、スティックでは3回前転キャッチも成功させるなど、見どころの多い演技だった。

田原正樹(神埼清明高校)は、タンブリングの高さ、スピードに卓越したものがあつた。大柄で伸身の姿勢が美しく、着地も揺るぎない。クラブの回しも巧みでスピードがある。2種目とも9.400というハイスコアで、選抜大会優勝者・斉藤剛大を上回った。

「演技派」と感じたのが、**一藤如月(水俣高校)**。ひねり技がうまく、タンブリングにも力があるが、それ以上に、演技中の表情やつなぎの動きのやわらかさなどが目を引い





<撮影：小林隆子>
2010 ALL JAPAN

見事なスティック操作を見せながらも、落下があり、8.975。タンプリングの線の美しさは相変わらずで、本当に惜しい落下だった。2種目目のクラブは非常によい出来で、9.225をマークしただけに、1種目目でのミスが悔やまれる。

地元・沖縄の大声援を受けて登場した**大濱康紀**（**県立南風原高校**）は、春の選抜大会でも見た選手だが、この半年足らずで目覚ましい進歩を遂げていた。選抜大会では、6点台だった得点を、2種目目とはいえ8点台にのせてきた。地元開催のインターハイということで、強化もされてきたのだろうが、これだけの短期間でこれほどの成長を遂げられるところに、男子高校生のポテンシャルが感じられた。

団体でのタンプリングに見事な一体感のある清風高校から個人のみに出場していた**山本恭史**（**清風高校**）は、高さはあまりないのだが、その分、正

た。北村将嗣のような「濃い演技」のできる選手になりそうな期待がもてる選手だ。

佐藤秀平（**聖和学園高校**）は、初めて見たが、正統派の美しい動きと演技で、とても印象がよかった。得点も、9.300（クラブ）、9.275（スティック）と印象通りの高得点が出た。ぜひもう一度見たい選手だ。

スタイルのよさと、徒手運動の大きさに目を引いたのが、**海老江和也**（**新湊高校**）だ。手具の投げ受けに不安定さがあり、点数は伸びきれなかったが、基本的な能力の高さを感じさせる選手で、2種目とも9点台にのせてきた。

ユースチャンピオンシップ以来、注目している**蛭川翔太**（**前橋工業高校**）は、今まで見てきた試合で、たいていスロースターターだ。1種目目の出来があまりよくなく、後半になると目が覚めるような演技をする。インターハイでもそうだった。1種目のスティックでは、



<撮影：小林隆子> 2010 ユース



<撮影：小林隆子> 2010 ユース

確さとスピード感抜群のタンブリングで力強さを見せた。

そして、男子個人 25 人目の演技者として、**臼井優華(岐阜済美高校)**が登場した。ユースチャンピオンシップでの見事な演技で、1年生ながら一躍「インハイ優勝最有力候補」と言われるようになった臼井だが、やはり初めてのインターハイの緊張があったのだろうか、1種目目のクラブで落下があった。つかみそこねのようなちょっとしたミスだったが、そのためラストも曲と動きが合わないなど、ややバタバタした感じの演技になり、9.375。ユースでは4種目とも磐石の演技を見せていただけに、本人にとっても悔やまれるインターハイデビューだったかもしれない。しかし、2種目目のスティックでは見事に挽回。1年生とは思えない見事な手具さばきと表現力を見せ、9.475 とここまででのスティックでの最高得点をマーク。ミスのあったクラブとの合計でも田原選手を上回り、この時点でトップに立った。

友國剛章(県立井原高校)は、がっちりした体つきの選手だが、パワーだけでなく、動きで魅せる選手。動きに緩急のある非常に魅力的な演技を見せてくれた。スローパートもじっくりと見せる一方で、力強くダイナミックなスピード感のあるパートもあり、というわくわくさせる演技構成には、「見ることができてよかった！」と思わせるものがあった。

川西伸也(坂出工業高校)も、ユースチャンピオンシップで見て、雰囲気のある選手だと思っていたが、今回の演技では、落下などもありやや残念な演技になってしまった。しかし、ユースでも垣間見えた、ラインの美しさ、動きのキレのよさなどは健在。まだ1年生なので、これに期待したい。

春の選抜大会で見て以来、かなりのお気に入りだった**横澤勇氣(盛岡市立高校)**は、最後のインターハイとなるこの試合で、最高のパフォーマンスを見せてくれた。まず、驚かされたのが、スティックの衣装。男子では珍しいオレンジ色にキラキラ、さらに肩のところが細い紐のように見える個性的な衣装だった。演技もその衣装にふさわしく、ちょっと妖艶な感じさえする、しなやかさがあり、ほぼノーミス！ 線の細い選手なので、力強さやダイナミックさで



<撮影：小林隆子> 2010 ユース

はなく、やわらかさ、しなやかさが持ち味で、表情や動き方から「猫」のような印象もある。その横澤選手のよさが凝縮された演技ではなかったか。続くクラブでも、着地や手具キャッチさえも「ふわり」とした軽やかさのある演技を見せ、演技終了後には満面の笑顔で、ガッツポーズも飛び出した。この「やりきった！」という感じのすがすがしい笑顔を見ると、もしかして高校までで新体操はおしまいにするのかな、と想像したりもする。それならば、それで最高の終わりでよかったね、とも思う。けれど、一方で、これほど个性的で魅力のある選手なのだから、大学でもぜひ続けてほしいと切に願わずにはいられない。



<写真提供：阿部好孝>

齊藤良輔(埼玉栄高校)は、登場したときから気迫が違っていた。ユースチャンピオンシップでも、春の高校選抜でも優勝に限りなく近い演技を見せながらも、優勝には手が届いていない齊藤選手にとって、これが最後のチャンスだということを意識していたのだろうか。そういう気迫はときに空転を起こし、ミスを誘発したり、演技を硬くしてしまうこともある。

るが、この日の齊藤選手の演技にはそういう不安の入り込む余地はなかった。気迫は見えるが邪念はない、立ち姿からそんな心境が見えるようだった。

1種目目のクラブで、ノームスの素晴らしい演技を見せ、クラブでは3位にあたる9.375をマーク。クラブの得点ではトップの臼井選手に並んだ。しかし、臼井選手はスティックで9.475という最高得点を出している。齊藤良輔が「優勝」をつかむためにはそれ以上の得点が必要だった。そのことを彼が意識していたのかどうかはわからない。しかし、いざスティックの演技が始まると、彼の演技には余分な力はどこにも入っていない軽やかさがあった。難しいタンブリングもこのうえなく正確に決め、のびの姿勢の美しさも存分に見え、つま先まで神経がいき届いている演技だった。演技中盤あたりから、会場の盛り上がりも最高潮になり、本人もノってきているのが伝わってきた。「優勝」に向かって加速するかのようなスティックの演技がおわり、得点は9.500。この時点で臼井選手を逆転し、トップに立った。

身長も高く、筋肉質で、迫力はあるのだが、その分、すこし動きが重く見えるかな、という印象のあった齊藤選手だが、この日の演技はどこまでも軽やかで美しかった。最後のインターハイ、今度こそ優勝を、というプレッシャーはおそらくあっただろうが、それをはねのけるだけの精神力が彼にはあった。会場の盛り上がりをまるで楽しんでいるかのような演技を、この大一番で見せてくれ



<写真提供：阿部好孝>

たことが、私は嬉しくてたまらなかった。

春の選抜大会では、2位に入っている**籠島遼(青森山田高校)**は、ユースチャンピオンシップではミスで順位を落としていたが、インターハイ予選では意地を見せて気迫のこもった演技を見せ、しっかりインターハイに駒を進めてきた。1種目目のスティックは、大きなミスなくまとめ9.200。インターハイ出場が決まってからも故障で練習できない時期もあったという情報もあったが、そうとは感じさせない演技で、2種目目に希望をつないだ。しかし、クラブでは途中でふらついたところがあったと思ったら、そのあと落下、ラスト近くでは2本投げで両方を落下するという悪夢のような終わりになってしまった。クラブのときは、足が痛いのか？と思われるところもあり、万全の状態でもインターハイの舞台を迎えられなかったことは、本人も無念だろうと思う。しかし、よいときの彼の演技がこんなものではないと知っている私も残念でたまらない。もう高3だが、大人びた雰囲気と高い技術をもつ選手なので、大学生になってからまだまだやれると思う。今回の悔しさをぜひこの先の飛躍につなげてほしい。

最後の演技者・**朝留涼太(小林秀峰高校)**は、すらりとした体のラインが美しく、腕の柔らかい動きが魅力的な選手だった。クラブの投げも高く、手具操作にも躊躇がないのが気持ちいい。最終演技者ながら、2種目ともミスなくまとめ、どちらも9.350という高得点をマーク。熱戦のしめくりにふさわしい演技を見せた。

この大会で見た選手たちの中で、この日の成績や出来とは関係なく、「あ～、今、見ることでよかった！」ととくに思ったのが、朝留涼太選手、友國剛章選手、佐藤秀平選手だった。初めて見た佐藤選手はもちろん、選抜でも見た朝留選手、友國選手も、きっとこれからもっともつと成長していこうからこそ、さらなる飛躍をする寸前のこの時期に見ておけたことが嬉しかった。

もちろん、過去にも見たことのある選手でも、今回最高の演技を見せてくれた選手、すばらしい成長を見せてくれた選手などの演技にも感激したが、今までは知らなかった(見たことがなかった)選手の中にも、こんな素晴らしい選手がいるんだ、ということや、これから先におおいなる可能性を感じられる選手が多いことに感動したのだ。

男子新体操は、まだまだ奥が深い……。そして、この大会で「高校生」として見ていた選手達の中から、数年後には大学生として、いや、ことによっては社会人になっても、活躍し続ける選手がいるんだろうと想像するとワクワクしてくる。

2010年美ら島で見せてくれた彼らの演技は、素晴らしかったけれど(中には悔しい演技になってしまった選手もいるけれど)、数年後には、「あれはまだ進化の途中だった」と思うんだろうなあ。お楽しみはまだこれから、だ。



<写真提供：阿部好孝>

2010 美ら島沖繩総体② 高校総体男子団体競技レポート

男子新体操の団体は、おもしろい。

エキサイティング！ それだけに、順位をつけることが本当に難しいと思う。とくにインターハイは出場チームが多く、試合時間も長い。

朝早々に登場したチームと昼休み直前に登場したチームと終了間に登場したチームを同じ目線で見て、評価することができるかどうか。また、審判の目線での判断に狂いはないにしても、会場で見ている観客にとってどうか？ どの演技もそれぞれに個性豊かで素晴らしいだけに、どんな結果になっても、どこか納得しきれない。そんな思いが残った。

つまり、「優勝にふさわしい」と思えるチームが複数あったということだ。「優勝にふさわしい演技」をしたのに、「優勝」という結果には恵まれなかったチームが複数いる、と私は思う。しかし、それは決して「間違い」ではなく、それだけ今大会がハイレベルだったということだと思う。

「優勝」には届かなかった、というただそれだけのことで、選手や関係者などが「ダメだった」と思わないでほしい、とかつてなく思った。

あの大会を見ていた多くの人が、自分にとっての優勝はここ！ 思っているはずだし、そこに名前の挙がるチームは1つではないと思うから。観客としては「ここが優勝！」と思える演技を、いくつも見る事ができた、それはとても幸せなことだ。だから、勝てなかったチームにも、そんな自分達のことを、自分達の演技を誇りに思ってもらいたい、と切に思うのだ。

2010 年美ら島沖繩総体。

男子団体は、それほどに熱い戦いだった。

トップで登場したのは**水俣高校(熊本県)**。個人にも出場していた一藤選手の美しいタンプリングが目目を引くが、じつは彼一人が目立つというわけではない。それだけ、他の選手達も美しい動きをしている。音楽と振り付けもよく合っていて、叙情的な印象の演技で、ほぼノーミス！ しよっぱなから素晴らしい演技が飛び出した。踊り感あふれる演技でありながら、組みからの高いジャンプなど、ダイナミックな見せ場もあり、古豪・水俣の健在ぶりを見せつけた。

3番の**青森山田高校(青森県)**は、本番直前にちょっとしたアクシデントがあった。本番フロア横のアップスペースで選手の1人が転んで、腰だろうかと強打したのだ。一瞬立ち上がれないのでは？ と思うほどの激しい転び方で、観客の多くが気がつくほどだった。そのアクシデントの影響があったのかどうか、でだしから少し不安な感じはあった。大きなミスがあった



<写真提供：ATSUO.T>

わけではないのだが、山田のよさである動きの部分での小さなずれ、鹿倒立でも1人ひじが曲がってしまう、など山田の美しい演技に見ている側が入り込みきるには、現実に戻ってしまう瞬間が何回かあった。結果的には、そのわずかに「引き込みきれなかった分」が表彰台との差になってしまった。近年では、どこのチームも入れてきているダンス的な動きの洗練度では、さすが山田！と思わせるものはあったのだが、それだけに小さな破綻も目についてしまったという感じだ。

青森山田の次に登場したのが**小林秀峰高校(宮崎県)**。このチームが登場して演技が始まったときの会場の空気は尋常ではなかった。まさに悲鳴！ なにしろ入りの組みがすごい！ 一番下に3人が並び、その肩の上に2人が乗り、さらにその上に1人が立つのだ。組みあがった形はきれいなピラミッドのような、タワーのような。1番上の選手の高さはものすごいことになっている。そして、驚くべきはその直後。演技開始するやいなや、そのピラミッド形のまま、6人全員が前に倒れて、



<写真提供：宮崎県体操協会>

伏臥で着地する。前に倒れるときに、形が崩れてしまわず、ちょうど1枚の壁が倒れてくるような倒れ方なのだ。こんな演技、見たことがない！ 倒れる瞬間、「失敗した？」と観客のだれもが思い、会場中から「きゃー」「うわー！」と悲鳴があがった。しかし、見事に着地。さらに、入りもすばらしかったがそこからの演技も、本当にすばらしかった。

じつは、私は以前からかなりの小林ファン。組みの素晴らしさは、よく知られているが、私が小林の演技を好きな理由はそこではない。組みやタンブリングだけでなく、じつは柔軟性にもすぐれ、曲のイメージを動きで表現する力も卓越していると以前から思っているのだ。今回の演技もそんな私の期待を裏切らないものだった。ほんとうに音がよくとれていて、曲の世界が感じられるすばらしい演技だった。惜しむらくは、3バックのときにわずかな軌道

のずれがあったように見えた(正面から見ていなかったのもうその見えたのかもしれない)。あとで、聞いた話ではユニフォームの乱れによる減点もあったそうだが、それは観客席からではまったくわからなかった。試技順があまりにも早かったが、これはもしかして優勝？ と思えるだけの演技を見せてくれたと思う。

今年は、宮崎の暗いニュースが多く、選手たちはちゃんと練習できているのだろうか、などと心配していた。地区大会が無観客試合になったという情報を得ては、胸を痛めていた。が、彼らはそんなこともすべて乗り越えてすばらしい演技を、インターハイで見せた。演技終了後の会場の拍手も演技冒頭の悲鳴以上に大きなものだった。まるでもう優勝が決まったような、そんなエキサイティングな演技だった。

県立稲取高校(静岡県)は、5月の団体選手権で見たときよりも動きが洗練されてきた印象だった。身長の高い選手の多い、見映えのするチームで振り付けも品のいい演技だったと思う。

県立井原高校(岡山県)の演技は、個人的にはもっと高評価でもいいと思うくらいよかった。昨年の全日本選手権ですばらしい演技を見せてくれた井原ジュニアの選手達がかかり入っているチームだけあって、体の線の美しさと柔軟性は圧倒的なものがある。バランスひとつとっても脚の位置が高い。おそらく出場チーム中、もっとも美しいバランスではなかったか。ローリングやもぐりなど男子ではまだ希少価値のある技も組み込んでいて、独自性がある。チームとしてはやや粗削りな面もあるが、とにかく魅力的な演技だった。同調性を見せる一方で、ばらばらに動いているように見える瞬間があり、それがまたずっとひとつにまとまる、そんな振り付けにぐっと心をつかまれた。女子の飛行船新体操クラブがぐっとトップにあがってきた時期の団体がこんな印象だった。個々の個性も強いのだが、世界観はひとつ！ そんなことを彷彿とさせる演技で、来年以降が本当に楽しみなチームだ。



そして、午前のハイライトだったのが盛岡市立高校(岩手県)の演技だった。演技の冒頭から会場の空気が違っていた。選手達が動き始める直前から会場がシーンと静まりかえったのだ。でだしの重厚な音楽にのせて見事な一体感のある動きを彼らが見せたとき、会場全体が息をのんだのだと思う。会場が静まりかえるくらいに、その動きは美しく、迫力があり、そしてすみからすみまで揃っていた。体の動きだけでなく、空気が呼吸がそろっている。そんな演技だったのだ。



冒頭の動きで、会場の心をつかみ、その後も、まったく乱れのない徒手、タンプリングを見せる。倒立のタイミングもこわいほど揃っている。ミスらしいミスもない。力のあるチームではあるが、本番でこのパフォーマンスができるというのは、奇跡なのではないか。そう思うほどの圧倒的な演技が終わったとき、会場からすぐに拍手が起きなかった。すこしばかり間があり、そして嵐のような拍手が巻き起こった。それほどまでにこの

作品は、会場全体をのみこんでいたのだ。

すべての要素が高いレベルでそろっていた盛岡市立高校だが、私がいちばん感動したのは、その「息遣い」だ。女子フロアよりの座席で見ていた私にもはっきりと6人の呼吸が聞こえてきた。それだけ、会場が静まりかえって見ていたということであり、それだけ呼吸がそろっていたということだろう。女子側にまではっきり息遣いが聞こえてきたのはこのチームだけだった。3分間の演技で、選手達が「1つの世界を描こうとしている」ことが伝わってくる演技だった。

私の中では、すでに小林の優勝？ という思いがあったが、この演技で勝てないということはないのでは？ とも思ってしまった。午前中だけですでに「優勝？」と思う演技が2つも出てしまった。なんてハイレベルな2010年総体なんだ！

午後一番に登場してきた**新湊高校(富山県)**は、なんと4人編成のチームだった。プログラムには登録選手6名の名前が載っているのに、なにかのアクシデントがあったのか。さすがに4人では演技の迫力などが落ちるのはいたしかたないが、このチーム、4人しかいないのに個々のレベルは高い！ 序盤での4人そろってのバランスの美しさで、「4人しかいないんだから、たいしたことないだろう」というような会場の空気を一変させた。個人でも美しさが目立っていた海老江選手も入っているようで、本来のメンバーで演技することができたら、と思わずにはいられなかった。健闘に拍手を送りたい。

袖ヶ浦高校(千葉県)は、演技序盤で、選手3人の組みを上を、開脚ジャンプで飛び越える大技が美しく、インパクトがあった。個人で出場していた齊藤剛大選手に代表されるように、基本的に動きは非常に美しいチームだが、基本的な徒手の部分でミスが出たのは残念。中盤以降にスタミナ切れなのか演技をまとめきれない部分が出てしまい、美しい動きを「団体」の演技の中でいかしきれなかった印象だ。

恵庭南高校(北海道)の作品には、目新しい技や動きが取り入れられていて、オリジナリティーが感じられた。屈伸が深く、十分な柔軟性もあり、伝統的にタンブリングも強い。交差も正確で安心して見ていられるいい演技だったが、鹿倒立でのミスをはじめ、ちょっとしたところでズレがあり、そこが目立ってしまった。力のあるチームだと思うが、「ツメがあまかった」そんな風を感じた。

光明学園相模原高校(神奈川県)は、5月の団体選手権、関東ブロック大会からだんだん調子を上げてきているように見えた。派手さはない堅実な演技だが、この短期間で飛躍的にまとまりはよくなったように感じた。一体感のある好感のもてる演技だった。

5月の団体選手権でも、一糸乱れぬタンブリングで会場を沸かせた**清風高校(大阪府)**は、インターハイでもそのよさを存分に発揮してくれた。タンブリングのスピード感やそろい方は本当にすばらしく、あまりにも印象がいいので、印象のわりに点数が低いように感じてしまうが、たしかに細かい

部分でのミスや雑な面もあったように思う。そこを課題として清風らしい、すばらしいタンブリングは継承した演技を、これからも見せてほしいものだ。

前橋工業高校(群馬県)の演技のよさは、おそらく胸の柔らかさにあるのではないかと思う。胸がやわらかいために、上体の動きがやわらかく、スムーズできれいなラインが見えるのだ。また、手の動きの美しさや足先に対する意識の高さもすごい。最初のポーズからの一連の動きは、独特の空気感があり、ぞくっとさせるよさがあった。ここの演技、私はとても好きだ！ただ、今回のインハイでは、鹿倒立をはじめところどころ短い？と思われた部分があり、動きにもすこし硬さが見えた。タンブリングの美しさで目を引く蛭川選手もまだ2年生なので、来年におおいに期待したいチームだ。

坂出工業高校(香川県)は、すべてにおいて高いレベルにあるチームという印象だった。振り付けも独特な雰囲気があって、魅力的で全体のまとまりもよかったし、組み技からのジャンプはかなりインパクトがあった。ただ、鹿倒立や3バックという目立つ部分ですこしばかりミスがあったのが惜しかった。今年は3年生の多いチームだったようなので、来年からのチームづくりがまた大変かもしれないが、ぜひまたいい演技を見せてほしいものだ。

そして、地元・九州勢としては最後のチームとなる**神埼清明高校(佐賀県)**が登場した。会場の歓声も、これまでのチームに対するものとは明らかに違う。この時点での1位は、盛岡市立高校。小林秀峰高校はすばらしい演技ではあったが2位にあまんじている。沖縄インターハイで九州勢が優勝できるかどうかは、この神埼清明高校にかかっているのだ。そのことが、おそらく神埼清明応援団以外の九州の観客をもヒートアップさせていたのかもしれない。

「頼むぞ、神埼！」

そんな異様な空気の中で演技は始まった。

土台になる人の肩にもう一人が立つ。神埼得意の組み技からの入りだ。この館に並んだ2人から果たしてどうするのか？後ろから人が飛び越してくるのだろうか？そんな想像を膨らませていると、突然もう1人が真上に飛び上がってきて、2段目の人間の肩の上に立った。一瞬にして縦3段の人間タワーが完成！次の瞬間にはもう次の演技に進んでいったが、そのインパクトに会場中が沸いた。

「頼むぞ、神埼！」という空気は、この入りの技が決まったときに、

「いけるぞ、神埼！」に変わったように思う。

次々に繰り出されるタンブリングの高さ、スピードも申し分ない。

なによりも、気迫と勢いがすさまじい！

盛岡市立高校の演技が、その世界観に



<写真提供：藤田義則>



<写真提供：藤田義則>

会場を引き込み「静」の空気を作ったのとは対照的に、神埼清明高校の演技は、会場の大応援を味方につけ、まるで会場中がいっしょに踊っているかのような「動」の空気を作り出した。

どちらも、すごい。どちらも、ここまで会場を引き込んだということは間違いなくすごい。息遣いが聞こえるほどに会場をしんとさせた盛岡の演技、会場中がゆれるような熱気と興奮を与えた神埼清明の演技、どちらが上

だなんて決められるだろうか。

ミスらしいミスもなく、最初から最後までフルパワーで走り抜けるような神埼清明の演技が終わった。選手たちは何度も何度も拳を宙につきあげた。それに応えるような会場の歓声と拍手。神埼清明高校の得点は、19.175。わずか0.075の差で盛岡市立高校をかわし、この時点でトップに立った。

トリとなった埼玉栄高校(埼玉県)の演技には新しい試みが多く取り入れられていて面白い。従来の男子新体操にはない動きと雰囲気でも魅力的だ。6人があえて揃わずに動いたり、独特の組み技など、5月の団体選手権からもさらに進化してきたように見えた。惜しむらくは、ここまで独特な世界観のある作品ゆえか、演じている選手に若干の照れが見えるように見えた。もっとナルシスティックに、世界に入り込んで演じられたとき、この作品はさらに新しい境地を見せてくれるのではないだろうか。2年生が多いチームなので、来年におおいに期待できそうだ。



<撮影：小林隆子>
2010 団体選手権

台風接近の中、行われた男子団体競技は、じつに熱く、じつに見ごたえのある戦いだった。そんな中で優勝した神埼清明高校の演技は、優勝にふさわしいものだった。そのことに疑う余地はない。

しかし、優勝にふさわしいと思える演技を見せたチームは、神埼清明だけではなかった。盛岡市立高校の演技が残した鮮烈な印象を、おそらく私は忘れない。また、かつてない厳しい状況にあった



<写真提供：盛岡市立高校>

宮崎県から出てきた小林秀峰高校のあの歴史に残るだろう組み技のすごみ、表現の美しさも決して忘れることはないだろう。

「優勝が1チームだけ」ということが、こんなに残酷に感じられたことはない。しかし、そう思える試合を見ることができたということは、観客としてはこれ以上ない幸せなことなのだろうと思う。

沖縄は遠かったが、本当に行ってよかった！ 掛け値なしにそう思えた大会だった。



<写真提供：藤田義則>



<写真提供：阿部好孝>

全日本ジュニアは、この選手に注目！ ～男子個人

さて、いよいよ明日から全日本ジュニアです。
(開会式はすでに今日行われています)

男子新体操にとっては、テレビドラマ「タンブリング」が放送されてから初の全日本ジュニア。すこしでも注目度が上がっているといいなあ、と願いつつ。ここでも少し、全日本ジュニアの観戦ガイドなどしてみましょう！

と思ったのですが…。

このところ、男子新体操をかなり熱心に見ているつもりだったので「観戦ガイドくらい書ける」と思っていたのですが、悲しいかな、男子新体操に熱を入れ始めてからあまり時間がたっていないので、さすがに今のジュニア選手のことまではまだあまり知らないのでした…(泣)。
昨年の全日本ジュニアの取材メモを調べてみたところ、印象に残った選手や演技のコメント書いてあるんですが、さすがにもうジュニア卒業した選手が多くて。残念です。

昨年までは、全部の選手まではチェックしていなかったんですよ。あ～悔やまれる。
で、そんな使えない取材メモですが、今年も個人で出場している選手のコメントもいくつか発見！

- 安藤梨友(NPO ぎふ新体操クラブ)09年 9位
小さいけれど、うまい！「本物の男子新体操！」という感じ。
- 大舌晃平(井原ジュニア新体操クラブ)09年 18位
指先の表現力がすごい！さらりと難しいこともやっけてのけるうまさがある。
- 小川晃平(井原ジュニア新体操クラブ)09年 8位
流れのある演技で気持ちがいい。リングでは落下があったが、とにかくうまい～！
- 植野 洵(恵庭ジュニア RG)09年 14位
スピード感あふれるスポーティーな新体操で、恵庭の先輩である「春日克之」を彷彿とさせる演技。
- 廣江壮太(京都少年体操学校)09年 33位
小さいのに、ちゃんと演技になっている。動きがきれいで将来が楽しみ！
- 川東拓斗(高松市スポーツ少年団高松新体操クラブ)09年 45位
とても動きがキビキビしている。小さいが踊り心を感じる。
- 島影公平(会津ジュニア)09年 31位
動きがきれい。神経のゆき届いた動き方をしている。

かなり、将来を見据えた(笑)見方をしていたようで、去年の時点で出来や成績はおかまなしの評価になっていますが…。おそらくここに名前が出ている選手たちは、去年見た段階で「次に見るときが楽しみだな」と思ったのだらうと思います。

また、今年5月に行われた「ユースチャンピオンシップ」に出場していた選手たちも何人か、この全日本ジュニアに出場します。こちらは写真がある選手は、写真入りでご紹介しましょう。

●五十川航汰

(NPO ぎふ新体操クラブ)

09年3位/10年ユース18位

この選手は、まだジュニアなのに、ほんとにうまいし、かっこいいです。憂いを含んだような目線がたまりません。動きもきれいで、タンブリングも強い、そして手具をよく見ているので正確な演技をするのでミスが少ないのです。4種目ある全日本ジュニアでは、この安定感はかなり強いと思います。優勝候補、と言ってよいのではないのでしょうか。



●佐久本歩夢(君津新体操クラブ)

09年13位/10年ユース19位

ユースのときの演技は、音をとらえるのがうまいという印象がありました。さらに自然体でありながら、のびやかさのある気持ちのいい動きをする選手です。腕の動きがきれいで、少年らしいポーズがとても印象的でした。ユースに出場していたジュニア選手の中で予選順位は15位と一番上でしたが、決勝のリングで場外があり、順位を下げてしまいました。ミスがなければ、かなり上位に上がってきそうな選手です。



●山本悠平(NPO ぎふ新体操クラブ)10年ユース23位

団体では全日本ジュニアの出場経験はありますが、個人では初出場です。しかし、ユースチャンピオンシップでは高校生に交じって堂々の23位。伸び盛りの選手です。スリムな身体でタンブリングも軽々と回り、ユースのときは、ロープの操作をしながらの宙返りがすばらしかったです。



●永井直也(半田スポーツクラブ)10年ユース16位

全日本ジュニアは、個人では初出場ですが、じつはユースチャンピオンシップでのジュニア最上位だったのはこの選手でした。彼はとにかく動きが美しく、華のある選手です。つま先や身体のラインの美しさ、柔軟性は「きっとバレエをやっていた子だ」と確信したほどです(バレエ経験はほとんどなかったそうです)。ユースから半年足らずでどんな成長を見せてくれるでしょうか。楽しみです。



<撮影:小林隆子> 2010年ユース

ほかにも、全日本ジュニアに出場する選手の中で、ユースにも出場していた選手について、以下のようなメモが残っていました。

- 大坪俊矢(滝沢村立滝沢南中学校)滝沢南の先輩である播磨選手を彷彿とさせる大柄な選手。まだ粗さがあるが、迫力は十分。
- 一戸佑真(光明クラブ)クラブのラストポーズに入るときの流れがかっこよかった!
- 斉藤祐磨(埼玉栄RG)とても小さいが、最初にみせた宙返りの高さにはビックリ!

今年は、個人では初出場という選手が多いのですが、団体ではすでに全日本ジュニアは経験済という選手も多いです。いよいよ出番が回ってきた今年、爆発的な力を見せてくれる選手もきっといるのではないのでしょうか。

いよいよ明日！ 例年以上に熱く観戦することになりそうな男子の全日本ジュニアに、今からわくわくしています。

全日本ジュニアは、このチームに注目！ ～男子団体

全日本ジュニア2日目となる24日には、個人後半2種目と団体競技が行われます。ジュニアの団体競技というのが・・・これまたエキサイトするんですよ。

とくに男子の場合は、むしろ団体のほうが先に人気が出た感もあります。組み技(人の上に人を乗せたり、飛び越えたりする)は、小柄なジュニアほど「ものすごいこと」をやっていたり、最近は、柔軟性にも秀でた選手が多くて、シニアとはまた違った面白さが男子のジュニア団体にはあります。まずは注目の男子団体から出場チームを紹介しましょう。

▼男子団体

試技順1番のえびの市立上江中学校は、昨年も7位と健闘したチームです。昨年の演技は、タンブリング、組み技などのレベルが高く正統派の新体操！ という印象でした。組み技で有名な小林工業と同じ宮崎県のチームだけあって、ハツとするような組み技を見せていました。

恵庭RGクラブは、昨年5位の実力派チーム。昨年の演技では人が人を投げる、それも連続するというサプライズな技を見せてくれました。動きも美しく、洗練されていました。今年になって行われた北海道の大会のDVDを見る機会があったのですが、ますます磨きをかけてきているようでした。今年はかなり期待できるのではないかと思います。

清風中学校は、昨年17位。オーソドックスな演技をしっかりと行う、ジュニアらしいチームでした。

神崎市立神崎中学校は、昨年2位のチーム。昨年もタンブリングの高さやそろい方など見事で、「本来の男子新体操」をしっかりと見せてくれました。

武豊市立武豊中学校は、平成元年～5年の5年間で4回ベスト3入りしている古豪(平成元年には優勝！)。昨年は全日本ジュニアに出場していませんでしたが復活です。

恵庭ジュニアも昨年は出場していません。しかし、前述の北海道の大会DVDを見た限り、かなりのレベルにきているチームのようでした。「恵庭RGクラブ」の弟分的存在なのでしょうが、侮れません。

小松島市立小松島中学校は、昨年16位。ジュニアらしいさわやかな演技を見せてくれました。昨年はとても腰のやわらかい選手がいて、後方ブリッジも披露してくれました。

八戸市立白銀中学校は、ここ2年は出場していませんでしたが、平成元年～11年まで連続してベスト3に入っており、平成2年からは5連覇を成し遂げている名門中学。「男子新体操王国・青森県」のルーツとも言うべきチームでしょう。男子新体操の名門・青森山田高校に進学して活躍している先輩達も多いので、久々の登場に期待がもてそうです。

半田スポーツクラブは、昨年8位。独特の振り付けが印象的で、かっこよすぎる演技でした。余韻の残る終わり方がとても印象的で、私の取材メモには「だれが振付けてるの？」と書いてあります。昨年は、演技内容に能力が追いついていない面もあったようですが、果たして今年は？ かなり楽しみなチームです。

●NPO ぎふ新体操クラブ(昨年4位)

昨年はかなりのでこぼこチームでしたが、小さい子ももれなく能力が高く、タンブリングのスピード、高さともすばらしかった！ 徒手能力も高く優勝候補の一角に違いないでしょう。

滝沢村立滝沢南中学校は、昨年9位。躍り感のあるステキな演技でしたが、昨年はまだつま先などの意識が弱い印象でした。夏のインターハイで準優勝した盛岡市立高校のメンバーのほとんどがこの中学の出身です。先輩達の活躍を目の当たりにして、どう成長しているか、とても楽しみなチームです。



鯖江市東陽中学校は、昨年12位でした。私はちょうど見れなかったようで、メモが残っていません(すみません)。

●華舞翔新体操倶楽部(初出場)

全日本ジュニアは初出場ですが、ユースチャンピオンシップと同時に開催された第1回団体選手権に出場していたチームです。また、小さい子が多いのですが、徒手能力が高く、柔軟性がすばらしい。団体選手権のときに度肝を抜かれたのが、6人そろっての後方ブリッジからの鹿倒立！これは斬新でした。果たして今回も挑戦してくれるでしょうか。注目したいです。ユニフォームもとてもセンスがよくて、フレッシュなチームです。



<撮影:小林隆子>2010年ユース

榛東村立榛東中学校は、昨年15位。昨年のチームはまだキャリアが浅そうな印象でしたが、前橋工業に進学して活躍している先輩たちも多いチームです。

神埼ジュニア新体操クラブは、昨年は出場していません。最後に全日本ジュニアに出場した2007年のメンバーは現在の神埼中学の主力となっています。今年のチームはすっかり代替わりしたのでしょうか、再び全日本ジュニアまで駒を進めてきました。久々登場の神埼ジュニア達に期待したいです。

●井原ジュニア新体操クラブ(昨年1位)

とにかく昨年の井原ジュニアはすごかった。全日本選手権でも、あまりにも演技にインパクトがあったためか、エキシビションで演技披露があったほどでした。とにかく動きの美しさ、組み技、タンプリング、柔軟性、すべてが高いレベルでそろったチームでした。しかし、今年は、かなりメンバーが入れ替わっているようです。それでも、井原ジュニアらしい演技を見せてくれるに違いありません。



阿久比町立阿久比中学校は、昨年は出場していません。2006年までさかのぼっても出場がありません。ここ数年、半田中学校が強かったのも同じ愛知県の阿久比中にはなかなかチャンスがなかったのかもしれませんが。今回のチャンスに懸ける気持ちは強いでしょうから、本番での演技に期待したいです。

小林市立小林中学校は、昨年6位。組み技の小林らしい技もありながら、動きの美しさが印象的なチームでした。平成12年と14年には優勝も経験している伝統あるチームです。今年もさらにレベルアップした演技を見せてくれるでしょう。

井原RGIは昨年11位。今年は、兄貴分である井原ジュニアを卒業した選手が多かったため、おそらくメンバーはかなり変わっているでしょうが、昨年のチーム同様、「小さくてもうまい！」とうならせる演技を見せてほしいです。

中学校単位のチームが多い男子新体操は、同じ学校でも年によってかなり状況が変化するようで、名門チームでも出場が途切れたり、新しいチームが急浮上したりしてきます。なので、昨年の順位や昨年の演技の感想などはあまり参考にはならないかもしれませんが、知っておけば、今年の伸びをより感じられるかもしれません。

※井原ジュニアのみ 2009年全日本の写真です。〈撮影：榊原嘉徳〉

2010 全日本ジュニアレポート① 男子個人総合優勝者

全日本ジュニアが終わりました。結果は、スポーツナビのニュースにも早速掲載されています。日本体操協会のホームページにも速報がすでに出ていますので、詳細はそちらでご確認ください。

☆男子個人総合優勝⇒永井直也(半田スポーツクラブ)

5月のユースチャンピオンシップで見たときに、「なんとまあステキな選手だろう」と、おばさんの目すらハート型にした永井選手ですが、中学生の男の子の急成長ぶりといったらおそろしいものがありますね。

半年足らずでこんなになるのか？ という演技を見せてくれました。

男子の全日本ジュニアは、2種目なので、今回はクラブとロープでしたが、2種目がまったく違うテイストの作品だったので、いろいろな魅力を見ることができました。

クラブは、日本人ならおそらくだれもが知っているさだまさしの名曲「秋桜」を使って、どこまでも静かで美しい演技でした。彼の美しい動きの1つ1つが心にしみていくような演技で、あの大きな代々木体育館全体が彼の演技に引き込まれてしんと静まり返り、息をのんでいるのがわかりました。女子側スタンドの観客、審判さえもです。

今まで数多くの大会、演技を見てきましたが、こういう空気は何回かしか経験したことがありません。昨年のオールジャパンでの青森大学の団体、それから、横地愛選手の引退試合となったオールジャパンで逆転優勝を決めた最後のクラブの演技のとき、そして、現在フェアリージャパンで活躍中の遠藤由華選手の最後の全日本ジュニアでの最終種目リボンの演技。どの演技も、ほんとうに会場が水をうったように静まり返っていたことを覚えています。今回の永井選手のクラブは、それに匹敵する、まさに「会場の空気を変える演技」でした。

永井選手は、男子新体操歴がそれほど長くないと聞いています。それだけに、いわゆる「男子新体操らしい部分」(タンブリングの強さ・技術・手具操作)などには、まだ成長の余地が多くあるようにも思います。しかし、この線の美しさ、表情を含む表現力の豊かさは、たぐいまれなものだと思います。これには脱帽するしかなく、今回の優勝も、観客審判ともに彼の魅力の前に平伏した結果のように感じました。





ロープでは、しっとりとしたクラブとは違う、スピーディーでクールな動きを見せて、かっこよさ全開でした。ちょっと北村将嗣っぽい印象だな、と思いましたが、それもそのはず。使用曲がピアノジャックの楽曲で、北村選手が使っているのと同じアーティストのものでした。(←おなじみ A さんのご指摘です。さすがです。)北村将嗣といえば、現在のトップレベルの選手の中でも、表現力では抜きんでたもののある選手ですが、

その選手のような雰囲気が出せる 15 歳って…。すごすぎます。

全日本ジュニア優勝で、オールジャパンへも出場することになった永井選手。大学生や高校生に交じっても、委縮することなく、この瑞々しい演技を見せてほしいと思います。オールジャパンでは 4 種目を見ることができるので、それもまた楽しみです。

<撮影:小林隆子>

2010 全日本ジュニアレポート② 男子団体優勝チーム

☆男子団体優勝⇒井原ジュニア新体操クラブ



【大舌晃平・小川晃平・西江琢臣・遠藤大輝・佐能佳樹・品川淳次・矢引天行・西江春輝】

去年の全日本ジュニア優勝チームである井原ジュニアですが、「今年はきびしいかも」という声も、前評判ではちらほらと聞こえていました。なにしろ去年のメンバーがすごすぎました。あのときのメンバーのなかで残っているのは大舌・小川の2人だけ。それが今年の「井原」でした。

さすがに連覇は無理かも…。

1日目の公式練習を見たときにも、いつも通りの美しい徒手や組み技のすばらしさは健在ながら、いかんせん選手たちが小粒な感は否めませんでした。「ここ、インターハイ会場だっけ？」と思うほどしっかりした体格の選手がそろっている神崎中学や小林中学のほうが迫力では一歩リードしているかな、そんな印象は正直ありました。

ただ、一方で、つま先やひざの伸びの美しさ、隙のなさ、そして柔軟性ではやはり井原が群をぬいている、とも思いました。

一言でいえば、「女子の新体操の基準なら、間違いなく井原の優勝！」そう感じました。

しかし、これは男子新体操の全日本ジュニアです。いくら美しくても、より高度なことができるチームが、より完成度高く演技をすれば、負けることがあってもそれは仕方のないこと。

でも、きっと。結果が優勝ではなかったとしても、井原ジュニアは今年も、「井原はやっばりいい！」と思える演技を見せてくれるな、ということは公式練習を見たときに、確信できました。



そして、男子団体の試技順 16 番で井原ジュニアが登場しました。すでに、神崎中学、恵庭 RG ジュニアなどが素晴らしい演技を見せて 18 点台を出していました。優勝するためには 18 点台は必須！ そんな中で動き出した彼らの演技には、「優勝」とか「連覇」という邪念はまったくないように見えました。そう見える演技でした。

とにかく井原の演技は、美しい。

それに尽きます。男子新体操ならではの徒手(上下肢運動・胸後反運動・斜前屈運動・側屈運動)などがすみずみまで美しく、6人がみんな同じ形、同じ動きをするのです。この澄み切った一体感の前には、ただため息しか出ませんでした。いや、すこしばかり涙まで出てきました。



このところ、注目度も上がってきた男子新体操。

タンプリングは、男の子なら誰でもあこがれるだろうし、練習も頑張るでしょう。

しかし、この美しい徒手を作り上げるためのトレーニングは、間違いなく地味で痛くて(柔軟は女子以上に大変でしょう)つまらないはずですが、でも、遊びたい盛り、元気な盛りの男の子たちがそのトレーニングをしっかりと積んできた結果、ここにこうしてこんなにも美しい動きを見せているのだな、と思うと泣けてきてしまいました。

ここまで頑張ってきてくれてありがとうね～！ そんな気分でした。

男子新体操はステキだけれども、女子では基本中の基本と言われる「足先の美しさ」という点だけ

は、すこしばかり残念な感じ、と私は思っています。女子の新体操を見慣れている人の多くはそう思うのではないかと思います。

もちろん、男子には男子のよさがあり、難しさもあるので、女子と同じようになる必要はないのですが、先日の体操世界選手権を見ても、日本男子はおしなべてつま先が美しく、「美しい体操」と呼ばれるゆえんはそこにあると感じました。もちろん、より難しい演技を完璧に



実施すれば、少々足先が汚くても勝つ選手がいるのが体操の世界ですし、男子新体操もそれでもいいのかもしれませんが。

しかし、これだけ芸術性の高いスポーツになってきている今、せつかくのステキな演技に酔っている最中に、「あら～」とってしまうほどに無意識な足先、というのはやはり残念な気がします。ふとした瞬間に緩むのは誰にもあることです。女子の新体操選手もバレエダンサーだってあります。だけど、「常にあまり意識していない」のでは、この先勝負できなくなってくるのではないかなと思います。

現に井原ジュニアのように、「そこ」をきっちりと踏まえた動きをするチームが出てきているのだから。

井原ジュニアの構成点は、9.450。しかし、構成点だけなら、8チームも9点台をマークしています。

2位の神埼、3位の恵庭も構成点は9.375と井原にかなり迫っています。

しかし、実施点を検証すると、9.175の井原が唯一の9点台です。

この実施点の高さは、徒手運動のたしかなさ、姿勢や足先の美しさのなせる技なのではないかと思うのです。ぐらつきなどのミスがなかったというだけで出る点数ではないのだと思います。

そして、これだけ「美しさ」が際立っているのに、それだけではないのが井原の凄さです。公式練習を見たときに感じた「小粒さ」は、井原の武器でもあるのです。「組み+跳び」のすごさは、間違いなく観客の度肝をぬきます。(また、どんなリスクな技をやっているときも、足や姿勢が美しいのです！)

今年も、全日本選手権への出場権を獲得した井原ジュニア。

11月にもう一度、代々木体育館で



この演技を見られることが楽しみでなりません。

まだ、井原ジュニアを見たことのない方、男子新体操を見たことのない方、全日本選手権にはぜひ足を運んでください。

井原ジュニアの演技を一度見れば、男子新体操の魅力を実感してもらえるに違いありません。

<撮影:大塚達也>

2010 全日本ジュニアレポート③ 男子個人総合上位入賞者

男子は、全日本ジュニア個人総合上位3位までに、11月19日からの全日本選手権の出場権が与えられます。

ここで、2位、3位に入賞し、見事、全日本選手権出場を決めた選手を紹介しましょう。

☆2位⇒小川晃平(井原ジュニア新体操クラブ)

高いタンブリングと、よどみがなくスピード感にあふれる動きに加え、1種目目のロープではその操作のうまさにも圧倒的なものがあつたのが小川選手です。小柄な選手の多い井原ジュニアのなかでは、いくぶん大き目ということもあり、その堂々たる演技には貫禄すら漂っていました。

今大会では、残念ながら2種目目のクラブで落下があり、優勝こそ逃しましたが、ジュニア離れた実力の持ち主であることは間違いありません。井原ジュニアは、団体でも全日本選手権出場を決めているため、小川選手は全日本選手権では個人4種目+団体に出場することになります。全日本選手権に個人、団体の選手を兼ねて出場する人は、高校生、大学生でも少ないことを思うと、かなりの負担かとは思いますが、若さを武器にぜひ力を出し切ってもらいたいです。ジュニアとしてはかなり完成度の高い演技は、シニアと



一緒に大会でもひけをとらないのではないのでしょうか。



☆3位⇒五十川航汰(NPO ぎふ新体操クラブ)

昨年の全日本ジュニア、今年のユースチャンピオンシップで見たときは、「かわいい男の子」という印象だった五十川選手。髪を切ってぐっと凛々しくなり、身長も伸びた今回は、非常に見映えもよくなり、すっかり「少年」という印象でした。五十川選手も、タンブリング、手具操作ともに超ジュニア級の巧さと精度が目をはきます。今回は、1種目目のロープではほぼ完璧と思われる演技でしたが、2種目目のクラブで、おそらく落下があったのでしよう（私の見ていた角度からだと身体で隠れて落ちたのが見えませんでした）。演技の印象より



も点数が伸びませんでした。しかし、落下があっても演技に綻びが見えない処理能力も含め、ジュニア選手としてはかなり完成された選手という印象です。
また、表情にも味があり、「男の色気」も醸し出せそうな選手なので、磨きをかければ表現力の面でも期待できそうです。



●向かって左から、小川晃平(井原ジュニア新体操クラブ)、永井直也(半田スポーツクラブ)、五十川航汰(NPO ぎふ新体操クラブ) この3名が、全日本選手権に出場します。
<撮影:小林隆子>※集合写真のみ大塚達也撮影。

2010 全日本ジュニアレポート④ 男子団体準優勝チーム

☆男子団体準優勝⇒神崎市立神崎中学校



【栗山隼・島ノ江友希・藤田啓暉・筒井雄飛・佐藤充・栗山巧・太田優成・中村太樹】

全日本ジュニア男子団体は、2位のチームまでが全日本選手権への出場資格を得ました。昨年までは1チームのみでしたから、このところのジュニアのレベルアップが認められたということでしょう。

2位に入ったのは、神崎市立神崎中学校。この夏のインターハイを制した神崎清明高校の弟分のようなチームです。

しかし、この弟分たち、偉大な兄達にまったくひけをとらない凄いチームでした。まず、身体もとても大きく、引き締まっていて「ジュニア」という印象がまったくありません。そのままインターハイ会場にいても遜色ないだろうという身体をしているのです。



動けばその凄さはますます光りました。神崎の伝統とも言うべき、「速い・高いタンブリング」はジュニアでもしっかり身につけていました。そして、後方伸身宙返り(スワン)の滞空時間のなんと長いことか！

徒手能力も高く、バランスで上げた脚の高さも高く、力強さと同時にすばらしい柔軟性も備えていることを見せてくれました。

そして。

神崎と言えば、「組み」です。

写真でもわかるように、高さのある組み、そしてその上から跳ぶなど、会場中が「きゃあああ！」と悲鳴を上げるような見せ場もたっぷり！ 惜しむらくは、鹿倒立でわずかな移動が見られたこと。そのほかはほとんど目立ったミスはない、すばらしい演技でした。



神崎の試技順は4番目でしたが、1番のえびの市立上江中、2番の恵庭RGクラブもすばらしい演技を見せており、恵庭にはすでに18点台が出ていました。しかし、神崎の演技は、やはり「ここまで一番！」と思わせるだけのものがありました。結果、恵庭をわずかに上回る18.250。ジュニアとしては最高レベルの得点をたたきだし、優勝に大きく近づきました。

私の隣で観戦していた A さんは、公式練習のときからかなり神埼の評価が高く、この時点では神埼の優勝を確信しているようでした。A さんの熱い神埼評は、こんな感じ。

「個人でも出場していた栗山兄弟の身体能力の高さは、個人のアップを見ていると群を抜いていたのに、団体に入るといい意味で彼らが目立たないんだよね～。



それだけ粒が揃っているということだよね。背格好から筋肉のつき方、動き方までそっくりな神埼中の選手たちを見ていると、彼らがどれだけ毎日地道に反復練習を一緒にやってきたか、が感じられるんだよね。それがもう凄い。偉い。子ども達も偉いが、指導者も偉い、と思う。脚や腕はもちろん、胸の動かし方までそっくりなんて、神経のいき届いた練習を、ものすごく積んでいるはず。そのうえ、スピード感のあるタンブリングは高校同様、日本一だと思うし。とにかく速い！ インターハイで見た高校生のチームは、迫力と勢いがすごかったけど、キッチリときれいにやっているという点では、ジュニアも負けてないと思うわ。」



残念ながら、井原ジュニアがわずかに上回り、準優勝となりましたが、A さんならずとも、「優勝してもおかしくない」と思えるだけの演技を、神埼中学も見せてくれたと思います。全日本選手権では、高校生や大学生に交じって、その中でも見劣りしないだけの迫力ある演技をきっと見せてくれることでしょう。

ジュニアならではの繊細さや柔らかさのある井原ジュニアと、ジュニアとは思えない迫力とスピードの神埼中学校。

この2チームが出場する全日本選手権。高校生チームもうかうかできませんよ～！

<撮影:大塚達也>

オールジャパン直前企画① 注目の男子高校生たち

☆齊藤良輔(埼玉栄高校)

ユースチャンピオンシップ2位、インターハイでは見事優勝を成し遂げた実力派。鍛え上げられた身体から繰り出すタumblingの迫力は超・高校級。長身をさらに上に上にと引っ張り上げるような伸びの姿勢は、つま先まで意識がいき届いていて、ため息が出るほど美しい。インターハイでは、試技順が遅かったため、1種目目のクラブはその時点で3位。最後のスティックに逆転優勝をかけるというプレッシャーのかかる展開になったが、その重圧をはねのけるだけの完璧な演技を見せて優勝をもぎとった。大人びた雰囲気をもつ選手だけに、これからの活躍にもおおいに期待したい。



☆臼井優華(済美高校)

高校1年生ながら、ユースチャンピオンシップでは優勝と鮮烈な高校デビューを飾った。しかし、期待のかかったインターハイでは、1種目目のクラブで手具をつかみそこねて落下。インターハイデビューの緊張感にややのまれた感があった。それでも、短時間で立て直し、スティックでは見事な演技を見せるあたりは、精神面でも超高校級と思わせた。タumblingの強さ、手具操作の多彩さ、巧みさなど、すでにシニア選手の完成形に近いような印象の選手だが、「もっと手具操作もうまくなりたいし、動きにやわらかさも出していきたい」と本人は貪欲だ。将来どこまで化けるか楽しみな選手なだけに、高校1年生のこの時期の演技をしっかり記憶にとどめておきたい。

☆前田優樹(青森山田高校)

10月に行われた青森県の新人戦で、見事優勝。今年度高校選抜大会4位、ユースチャンピオンシップ3位の実力を見せつけた。半田市立半田中学が団体優勝した2009年の全日本ジュニアでは、団体優勝とともに個人でも6位に入っている実績をもつ選手だ。

柔軟性にすぐれ、その柔らかさを生かして、独特の表現力をかもし出す。また

手具操作も器用で、投げた手具が宙に浮いている間の動きもしっかり踊り心を感じられ、ふわりとやわらかいキャッチはとても気持ちがいい。高校生ながらも、演技中に見せる「せつない表情」は、男の色気も十分。技術に表現が伴ったかなり見ごたえのある演技を見せてくれそうだ。



☆斉藤剛大(千葉県立袖ヶ浦高校)

今年度高校選抜大会優勝者、インターハイでは惜しくも4位だが、不利といわれる試技順1番でのこの成績は立派。インターハイ種目のクラブとスティックは、種目によってまったく曲調も違わせ、印象も大きく違っていたが、どちらも十分に踊りこなせるだけの力をもっている。1つ1つのポーズが非常に美しく、粗の少ない選手だ。スピード感あふれるシエネは見事というほかない。

☆谷 俊太郎(青森山田高校)

今年の青森山田高校の団体メンバーの中でも、中心的な役割を果たしていた彼。大きな体で、タンブリングも強く、きりりとした表情で演技をぐっと締めていた。表現力も感じられる選手で、「オトコ！」という感じのカッコいい演技がとてもよく似合っていた。

ユースチャンピオンシップのときのクラブの演技では、あの大きな体で、フロアを縦に使って(助走が短い)の宙返りを入れていたり、ロープでも宙返りしながらの見事な手具操作を見せたり。ダイナミックさと同時に高い技術も見せてくれる選手だ。激戦区・青森県だけに、インターハイへの個人での出場経験はないが、実力は十分にもっている選手だ。



☆佐藤 秀平(聖和学園高校)

彼の演技は、まだインハイのDVDでしか見ていないのだが、インハイのときからAさん評は高かった。そして、DVDを見て、私もかなりお気に入りになってしまった選手だ。

彼のよさは、「行間の余韻ある演技」かな、と思う。これでもかというほどに技のつまった演技構成ではないように思うが、それだけに動きや間合いで見せる部分がたっぷりあり、そこで彼の魅力が存分に発揮されている、そんな印象だ。

とくに腕の柔らかい動きと、それに伴う肩や顎の動かし方など、心にくいばかりだ。指導されている方の力に負うものも大きいだろうが、指導すれば誰でもできるというわけでもないのがこういった「ニュアンス」の部分であり、彼はその点で長けているように思う。

こういう力(才能と言ってもいい)をもった選手が、あと4年なり新体操を続けて、技術を磨いてくれたら…どんなステキな選手になるだろう、と思わずにいられない。

☆横澤 勇氣(盛岡市立高校)



選抜大会で8位だった彼を見たAさんが、彼につけたキャッチフレーズが「男子新体操のジョニー・ウィアー」、インハイのDVDでやっと彼の演技を見て、私はやっとその意味がわかった。たしかに。男子新体操には独特の個性をもった選手だ。

男子新体操の代名詞である「ダイナミック」「迫力」などという言葉とはすこし距離がある。「しなやか」であり、「艶やか」でもある。男子新体操としてはすこしばかり評価されにくそうなそんな個性的な選手でありながら、インハイでは見事5位。本番の演技が終わったときの満足そうな表情には、「出し切れた」感があった。繊細な印象のルックスや演技からは想像できない精神的なたくましさも併せもっているようにも思えるインハイでの見事な演技だった。

大学生を見ても、ジュニア選手を見ても、こういう個性の選手はあまり見かけない。そういう意味では、この先、どういう成長を見せてくれるのかとても見てみたい選手なのだが。

進学するのかどうか、新体操を続けるののかもまだ聞いていない。ことによっては今回は最後の演技になるのかもしれない。だとしたらなおさら、絶対に見逃さないでほしい選手だ。

☆籠島 遼(青森山田高校)

あえて言わせてもらうならば、今年、Aさんをもっともがっかりさせた選手である。

春の選抜大会で2位。そのときの演技を生で見たAさんの、評価はかなり高かった。「今回は2位だけど、インターハイの優勝にはからんでくる力は十分にある。技術も高くて穴がないし、大人びた演技で魅力がある」と言っていた。

そして、ユースチャンピオンシップでは、やや不調気味で、8位に終わったとき、「最後の年というプレッシャーがあったのかな。彼の力はこんなものじゃないのに」と、わが子のことのように案じていた。そして、チームメイト達との激戦を勝ち抜いて彼が、個人でのインハイ出場を決めたときには、涙を流さんばかりに喜んでいて。



そして、沖縄でのインターハイ。1種目目のスティックでは、良さが見える演技を見せてくれた。ミスも最小限におさえ、優勝圏内にとどまっていたときに、「やはりスゴイ！ うまい！」と、会場にいたAさんは本当に喜んでいたので。が、2種目目のクラブでの大崩れ。Aさんは、本当にかっかりして、半ば怒って私にメールを送ってきた。「あきらめんなよ！」

私も、あとになってインハイのDVDをやっと見て、Aさんの怒りの意味がわかった。籠島遼は、インハイでは15位。だけど、本来の力はもっとずっと上にあっただの。「出し切れなかった」それも、最後まで必死に頑張ったけれど出し切れなかったというよりも、ちょっと「あきらめてしまった」のが見える演技だった。それが、期待して応援する気持ちが強かったAさんには悔しかったのだ。私もDVDを見ながら、同じことを思った。「これで15位なんて悔しい……」ミスしたのだから仕方ない。結果は結果だ。コンディションも万全ではなかったのかもしれないし。

だけど、ミスしていない部分では、こんなにもうまい！ こんなにも美しい、深みのある演技をしているじゃないか！ どうして、この力が結果に結び付く演技ができなかったのか…。

籠島選手を責めているわけではない。じつは私たちはそういう選手こそ好きなのだと思う。「なぜここで」というミスをしてしまう。好きでミスするわけではないし、ミスしないための努力をしていないわけではない。だけど、ミスしてしまう。その弱さなのか運のなさなのか、そこが愛おしくなってしまう、応援せずにはいられないのだ。

彼には、頑張ってもらいたい！ 私たちの勝手な思い入れに応える責任は彼にはまったくないけれど。「弱い自分に勝った！」という彼の晴れ晴れとした顔が見たいのだ。彼にはその力は十分にある。そう信じている。

☆平野泰新(青森山田高校)

本日終了した東北ブロックの新人戦で、限りなく優勝に近い僅差の2位だった平野。1年前は、まだ中学生だったが、オールジャパンでの演技で見せた表現力は、ジュニアレベルを大きく超越していた。この春、青森山田高校に進学し、インハイでは団体メンバーにも名前を連ねた。強豪・青森山田では、1年生が団体レギュラーに入るのはきわめて珍しく、そのことから平野の非凡さがわかる。

とにかく線の美しい選手だ。1つ1つのポーズが、意味ありげに見える。そんな平野の個性あってこそ、クラブで見せる「シンドラのリスト」は、情感たっぷりの名作となった。まだ、高校1年生という年齢を考えると、この先どれほど魅力を増していくことか、楽しみでたまらない。



オールジャパンでは、高校の1年間での成長ぶりをしっかりと見せてくれるだろう。ものすごく、楽しみだ。

＜撮影：小林隆子＞

☆蛭川翔太(前橋工業高校)

言わずと知れた？ Aさんの大のお気に入り！ いや、私だって気づいていたのだ。ユースチャンピオンシップでの4種目を見るにつれ、どんどん彼の演技にひきこまれていった。男子としては卓越した脚のラインの美しさや、がっつりした体格にそぐわないほど繊細な上半身や腕、指先の動きなど、「思った以上に」「見た目以上に」ステキな選手だということを、ユースのあの2日間で私は知った。しかし、私以上に、Aさんは彼をとことん高く評価している。そして、期待し、応援もしている。インハイの1種目目でミスしたときには落胆のメールを私に送りつけてくるくらいに。彼女は熱く応援しているのだ。

Aさんの研究によると、蛭川翔太は、非常に穴のない選手だ。徒手も美しいし、タンブリングの空中姿勢もすばらしい。そして、手具操作の能力もかなり高い。ただ、スロースターターのように、最初の種目でミスをしやすいらしい。そして、種目を重ねることによくなるのだそうだ。できることなら、オールジャパンでは、最初からエンジン全開で4種目をやり切ってほしい。そうすれば、きっとAさんは鼻高々になるはずだ。「ね、言ったでしょ！ 彼はスゴイんだから」と。

☆石井侑佑(会津工業高校)

とても残念なことに、彼の演技を私は見たことがない。選抜大会では4位に入っているにもかかわらずインハイ出場を逃しているので、頼みの綱のインハイDVDに彼の演技が入っていないのだ。だから、今年3月の選抜大会で彼の演技を見たAさんの石井評をそのまま転載させてもらおう。

「石井侑佑くんは、とてもきれいで繊細な演技だった。福島県ってけっこう男子の新体操選手を輩出しているんだけど、柴田くんや籠島くんみたいなテクニシャンタイプとはまた違って、木村功さん(福島県立葵高校→花園大学)のタイプかな。情感豊かな美しい演技を見せてくれる選手になりそうな期待大よ。今回のロープの演技なんてロープが生きてるみたいだったからね～。女子でいうと成松エリナちゃんみたいな雰囲気表現力あるのよ～。ちなみに2007年の全日本ジュニアでは6位に入ってる選手だわ。」

じつは石井侑佑も、Aさんのかなりのお気に入りだ。インハイに彼が出ないと知ったときにはかなりがっかりしていたし、オールジャパンの出場者に名前を見つけたときには舞い上がっていた。私も、やっと見ることができる彼の演技がとても楽しみだ。

☆友國剛章(井原高校)

彼も、Aさんのお気に入りだ。
(今回は「Aさんセレクション」になっちゃった！…偶然です)
インハイで見た彼の演技を、Aさんはとてもほめていた。どこがいいのか？ とにかく「今、この演技を見ることができてよかった」と思う演技だった、とAさんは言うのだ。



私もやっとDVDで見ることができたが、Aさんの言っている意味がわかる気がした。もちろん、う

まい。すでに十分にうまいのだが、この先どんなに成長していくのがとても楽しみな選手なのだ。正直、今の演技の印象はわりあい地味だと私は感じた。でも、いろいろなことができるだけの素地があることは十分に感じられる。インハイでの演技は、種目によって曲調もテンポも異なっていて、どちらも似合っていた。表現の幅の広さ、これからの広がりも感じられる演技だった。Aさんは彼の動きの緩急のつけ方がとてもいいと言う。私もそれは同感だ。長く続けてくれれば、きっと今以上に光り輝く演技を見せてくれそうな、そんな期待がもてる選手、Aさんと私にはそう思える。だから、「まだちょっと地味？」に見える今の演技を見ておけることが貴重なのだ。オールジャパンは、私にとっては初となる彼の生演技。期待したい。

オールジャパン直前企画②

これが、リアル・タンブリング！ ～高校生男子団体

今年は、男子新体操がテレビドラマになった記念すべき年でした。ドラマ『タンブリング』は、残念ながら大ヒットドラマというわけにはいきませんでした。男子新体操の知名度をアップし、関心を高めてくれたという点で、大きく貢献してくれたと思います。

その『タンブリング』は、高校生の男子新体操部を描いたドラマでしたが、オールジャパンには、ドラマではなくリアルに新体操に懸けている男子新体操部がたくさん出場しています。男子新体操の醍醐味というべき同調性、驚愕の組み技、スリルに満ちたタンブリングでの交差、そして、昨今ではダンス的要素も組み込んだ団体は、見所たっぷりです。まずは、高校生チームを紹介しましょう。

☆小林秀峰高校



「2010年インターハイはあの3段タワーを抜きには語れない」とAさんに言わしめたのが小林秀峰高校の入りの組み技だ。写真で見ても凄さは伝わるだろうが、じつはそのあとがもっとスゴイ！タワーの体勢のまま、6人が前に倒れるのだ。初めて見たら、「失敗？」と血の気が引くようなこの技が、この夏、熱いインターハイの会場をいちだんとヒートアップさせた。

しかし、小林秀峰高校が素晴らしいのは、こういった組み技だけではない。改めてインターハイのDVDを見直してみたが、今年の演技は、気持ちがいいほど音楽と動きが合っていた、と思う。バランスや鹿倒立などお決まりの徒手要素の前に入る動きなど、非常に工夫されていて魅力的かつ音との一致を演出している。ところどころに挟み込まれた独特なポーズもすばらしいスパイスになっている。また、腕のやわらかい動きが6人でぞくっとするほど合っている。入りのタワーのほか、終盤にも組み技の大きな見せ場をもってきているこの作品には、男子新体操の魅力が詰まっている。この演技は、絶対に見逃さないでほしい。絶対に見る価値のある団体だ。

☆神埼清明高校

今年のインターハイの優勝争いは熾烈だった。その熾烈な戦いを制したのがこの神埼清明高校だ。神埼の演技も最初に度肝を抜くような組み技が入っている。人の上に人が立っているところから始まり、その後ろからもう1人が飛び出してきた、人間の3段重ねができるのだ。その後も息をもつかせぬスピードでタンブリングを繰り返して、すぐにまた組み技が入る。

他の上位チームに比べると、余計な動きや振り付けはあまり入っていないシンプルな演技にも見える。そして、シンプルだけに力強く、ダイナミックだ。タンブリングに強さと速さがあり、3バックもびしっと揃う。徒手もシャープな形の鹿倒立など、確実な巧さがある。「ザ・男子新体操」とでもいうべき正統派の演技は、男子新体操の王道とも言える



だろう。春の選抜大会では、2位にあまじい悔しさを糧にして、夏の優勝をもぎとった神埼。オールジャパンでも、その強さと巧さを見せつけてくれるだろう。

☆盛岡市立高校

厳しい戦いだった今年のインターハイ後には、いろいろな人から「このチームが優勝でもおかしくなかったのでは」という声が聞かれた。そのときによく名前が挙がっていたのが、先の小林秀峰高校とこの盛岡市立高校だ。とくに盛岡はミスらしいミスもなく、会場の雰囲気をも一変させるような演技だっただけに、優勝にふさわしい準優勝だったという声が多かったのだ。



改めてDVDを見直してみたところ、音楽と動きや振りの一体感に戦慄を覚えた。とくに演技冒頭の6人がまとまって動き始め、ばらけるまでの一連の動き。これは鳥肌ものだ。その直後には、6人そろってフロアの後ろから前に向かってのタンブリング、フロアを斜めではなく前後に使って6人そろって、しかも最後にはひねっている。これもインパクトが大きい。徒手要素の前や後ろに、動きが入っていてそれがなんとも言えない余韻を残す。やはり、この演技はいい。音楽とともに心に染み込んでくる演技だ。オールジャパンでは、インハイとはメンバーが変わっている可能性が高いが、後輩達がいよいよこの世界観を引き継いで演じてくれることを祈りたい。

☆青森山田高校

春の高校選抜では優勝した青森山田高校だが、インハイでは4位に終わった。すこしばかりのミスもたしかにあったが、それよりも今年の青森山田は、他の上位チームに比べるとタンブリングが弱かった、生意気ながら、DVDを見直して改めてそう思った。



しかし。ある意味、それでも4位ということの凄さも感じた。昨今は、どこのチームもダンス的要素を取り入れてきている。ずいぶんあかぬけたなあ、と思う演技が男子団体には増えてきた。しかし、やはりその流れを作ってきたのは青森山田であることを思い知らされる演技、だったのだ。演技冒頭から、6人そろってのバランスまでの流れは、やはり「青森山田ならでは」の美しさ、華麗さがあり、これはなかなか同じレベルで模倣はできない、そう思わせるものだ。

腕や胸の動きやぐーっと引っ張るような動きを駆使して、細かい部分で音楽と合わせて見せる。これはやはり青森山田の真骨頂だ。青森山田も、インハイとはメンバーが大きく変わることが予想され、ことによっては完成度は下がっているかもしれない。しかし、「やっぱり青森山田！」と思わせる演技はきっと見せてくれるに違いない。

☆井原高校

今年のインターハイでの順位は8位だが、井原の演技は、「未来につながるもの」を感じさせてくれる演技だったと思う。

井原の特徴である柔軟性も、十分に見られ、男子ではなかなか難しいもぐり回転も6人そろって高いレベルで実施できたり、必須であるバランスや

鹿倒立も秀でた柔軟性をいかした形が群を抜いて美しい。構成も凝っていて、とくに最初のタンブリング連続のあと、1人の選手がフロアの向かって左端から走ってきて行う組み技は面白かった。男子新体操の団体としては、わかりやすい盛り上がりがないともすれば単調に感じられてしまいそうな曲を使っているが、それだけに、流れるように美しい井原の選手達の動きが際立っていたように思う。1・2年生の多いメンバー構成だったことを考えると、この先がとてつもなく楽しみなチームだ。



☆恵庭南高校

インターハイでは10位と奮わなかった恵庭南だが、春の選抜大会では5位に入り、オールジャパンの出場権を獲得した。北海道のチームらしい男らしくて勇壮な印象の演技は、オーソドックスな「ザ・男子新体操」という感じだ。以前からタンブリングの強さには定評のある恵庭だが、それは今も変わっていないようだ。演技序盤での乱れうつような連続タンブリングは迫力がある。一方で、中盤のスローパートではおもしろいカノンが入っていたり、構成にも工夫が見られる。3年生の多いチームだったので、ジャパンにはどういうメンバーで出てくるのかわからないが、先日の全日本ジュニアでも、有望なジュニアがたくさん育っ

ていた恵庭のことだ。おそらく、下の学年にも力のある選手がいるに違いない。このオールジャパンが、3年生の集大成の場になるにせよ、新人の全国デビューの場にせよ、頑張ってもらいたい。

<撮影:榊原嘉徳> 2009 年 ALL JAPAN

☆坂出工業高校

スポーツマンらしい坊主頭の選手たちなので、一見した感じでは「こじられた演技」をしそうには見えないのだが、どうしてどうして！ おおかたの予想を裏切って、坂出工業の演技は、とてもおしゃれだった。曲の冒頭の「カタカタ」という音は、フラメンコの靴で床を踏み鳴らす音だろうか。曲が始まると、いきなり情熱的なフラメンコギター、そして、選手達の動きも非常に洗練されていて、思わず「かっこいい！」と声をかけたくなる。演技の途中で、個人演技のラストに入っているようなすこし変わったポーズを6人がそろってするところが何箇所かあるが、それがとてもいいスパイスになっていて、この作品のミステリアスな雰囲気盛り上げているように思う。

とくに演技の序盤と終盤の動きが秀逸で、「一体から分離そして、再会」というストーリーがうかんできるといった演技だった。このチームもほとんどが3年生だったが、これだけ洗練された動きのできる選手達にはぜひどこかの大学で新体操を続けてもらいたいものだ。

<撮影:榊原嘉徳> 2009 年 ALL JAPAN



☆埼玉栄高校

今年度インターハイチャンピオン・斉藤良輔を擁する埼玉栄高校の団体は、3部構成のドラマを見ているような作品だった。スタートは、力強く迫力のある男子新体操ならではの演技で、

中盤のスローパートでは美しさやダンス的な動きのおもしろさを見せる。そして、後半に入ると他のチームはやっていないような独創的なタンブリングや組みなどを繰り出し、ちょっとサーカスを見ているような気分させる。なかなか盛りだくさんで贅沢なプログラムだと言えるだろう。



それだけに、1つの世界観にどっぷりと浸るような見方が出来ず、そこで評価が左右される面もあるように思うが、とても意欲的で将来性を感じさせる演技であることは間違いない。

後半で見せる、手支持なしの側転のようなタンブリングや、中盤に入っている3バックかと思いきや、途中からばらけていくタンブリングなど、「はっ」とさせる技や構成が独特で面白い。このチームは齊藤良輔以外は1・2年生。来年はますます侮れない存在になりそうだ。

<撮影:小林隆子>

オールジャパン直前企画③

侮れないジュニアたち ～男子ジュニア団体

☆小林中学

全日本ジュニアでは、4位だった小林中学だが、2位の神崎中学、3位の恵庭RGが出場辞退したため、繰り上がりでジャパン出場となった。

「繰り上がり」といえど、全日本ジュニアでの小林中の演技は、十分、表彰台の可能性のあるものだった。試技順がおわりのほうだったため、すでに演技が終わっていた井原の優勝を予測してはいたものの、小林中の演技が終わったときに、「う～～ん、どっち？ 小林もよかったよね」と思ったのを覚えている。結果、井原には及ばず、4位に終わったが、もっと上位にきてもおかしくはない演技だったように思った。

今年のチームは、まず体格がいい。インターハイにこのまま出ても違和感ないんじゃないか、という体格であり、実力だ。小林秀峰高校がやっていた組みをアレンジして演技に入れていたが、それもつい高校生と比べると～なんて思われて

しまうのは、体格がいいゆえんだろう。高校もそうだが、決して「組み技」頼みではなく、意外なほど振り付けや動きにも工夫が施されている。彼らもまた小林秀峰高校に進学していくのであれば、当



分、小林王国は安泰かもしれない。今でも十分うまいのだけど、あと2年、3年先にはどんなに成熟し、洗練されるだろうと楽しみなチームだ。

<撮影:大塚達也>

オールジャパン 2010 レポート① 永井直也（半田スポーツクラブ）

「美的」

今回のオールジャパン、とくに男子は「私一人では見きれない」と思っていたので、強力な助っ人2名を確保しておいた。言わずと知れたAさんと、名前が出るのは今回が初のOさん。2人ともともと私の「新体操母仲間」であり、「観戦仲間」だ。かれこれ10年くらい一緒に女子の新体操を追ってきたし、いつも熱く新体操を語っている仲間だ。

しかし、この2人もついに、最近では限りなく男子フロア寄りで観戦するようになってきた(もちろん、女子にも未練はあるので、男子正面に座るのは忍びないのだ)。その2人が、ジャパンは3日間フル観戦するというので、私は2人のために「取材シート」まで作り、100円ショップで購入したクリップボードにはさんで渡しておいたのだ。「気付いたことや感想を書き込んでおいて〜」と。

そのシートのおもしろいことと言ったら、私が独占しておくのは申し訳ないくらいなので、このジャ





パンレポートにはがんがん反映していくつもりだ。

というわけで、もしかしたら出場選手全員、いずれは登場してしまうかも、な勢いでジャパンレポートを続けていくつもりだが、昨日の社会人から今日は一気に「ジュニア」にとんでみる。

そう、お待ちかねの(?)永井直也の登場だ。

永井といえば、これ！ クラブの「秋桜」は、今回も泣かせてくれた。「秋桜」は嫁ぐ前日の娘の心情を歌ったものだが、永井のこの演技からも、「育ててくれてありがとう」という思いが伝わってくる。15歳の男子に、そんな心情があるとはあまり思えないが、少なくともこの作品を演じるうえで、そういう気分はもって踊っているのではないかな、と思うのだ。今回は、すこしばかりミスがあったようで、演技終了後、ついていたコーチからおでこをぺちっとやられて苦笑いのような表情も見せていたが、ミスをミスとは感じさせず、世界観を壊すことなく踊りきったところに、彼なりの根性やこだわりが見えたように思う。ちなみにOさんは、この永井のクラブに対して「王子全開！」とコメントしている。たしかに。

まだ中学3年生の永井は、じつはタンブリングも手具操作も比較的ベーシックなものしかやっていない。驚くほどの強さや高さ、テクニク、で見せるタイプの選手ではない。しかし、とにかくその「線の美しさ」はジュニア選手の中では、群を抜いている。いや、こうして高校生・大学生に交じっても、美しさでは際立った存在なのだ。柔軟性があるので、すべての形が無理なく美しいし、大きい。Aさんは、「斜前屈、深い！」と感嘆コメントをしている。また、つま先の伸びもすばらしい。持って生まれたものもあるのだろうが、意識の高さ、のなせるものでもあるだろう。「こうしたほうが美しい」ということを、半ば無意識に気をつけられる、そんな選手がときどきいる。女子にも男子にも。永井もそうなのではないか、そんな風に見える。



曲表現にも長けたものがあり、リングではフラメンコ調の曲、ロープではスピード感のあるピアノジャックの曲、そして「秋桜」と、いろいろなイメージの曲に挑戦しているが、どれもはまるのだ。表情1つとっても、しっとりした曲のときのせつなげな表情もよいが、今回の写真にあるようなきりりとした厳しい表情もなかなか決まっている。線が美しいので、美しい演技が似合うのは間違いないが、そこにとどまらずに表現の幅を広げていきそうな予感がする。「美しさと表現力を兼ね備えた男子選手」という意味では、フィギュアスケートの羽生結弦選手に通ずるものがあるようにも思う。シニアの舞台でもすでに結果が出始めている羽生選手に、永井直也もぜひ続いてほしいものだ。

今大会では、手具操作の面でのミスや、単調さが目立ったが、なにしろまだ中学生だ。人が望んでもなかなか手に入れないものをすでに持っている永井直也が、これからどこまで努力で、技術を習得し、熟練してくるかが楽しみでならない。



ちなみに、ここに掲載した写真はどれもステキだが、カメラマンいわく「力が入りすぎて失敗したショットが多かった」のだそうだ(苦笑)。カメラマンを失敗させるほどの魅力が、永井直也にはある。実際、今大会でも永井の演技中のシャッター音の多さは半端なかった。常に絵になるし、撮り逃したくないと思わせる瞬間が多いので、カメラマンもつい気前よくシャッターを押してしまうのだろう。永井直也は、そんな選手だ。

どんな進路を選び、どんな高校時代を送るのか、あれこれ想像も期待もふくらむが、とりあえず、ジャニーズやジュノンボーイ方面に轉身するのだけは当分お預けにしてほしい。彼には、男子新体操で見せてほしいものがまだまだあるから。

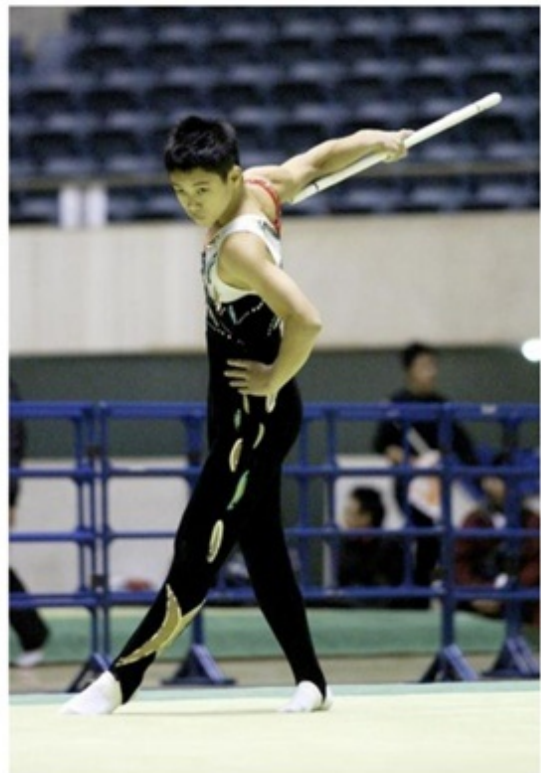
<撮影:小林隆子>

オールジャパン 2010 レポート② 小川晃平（井原ジュニア新体操クラブ）

「凜」

全日本ジュニア2位になり、オールジャパンに出場した小川晃平は、ジャパンの舞台でよくも悪くも「ジュニアらしい」演技を見せた。手具の落下や、ちょっとした足元のふらつきなどが出てしまった若さは、まさに「ジュニアらしさ」が悪いほうに出ってしまったのだろうが、これは愛嬌でもある。何しろ彼はまだ 15 歳なのだから。

一方で、わが取材チーム（Aさん&Oさん）と私が、全員そろってメモしているのが「伸身姿勢の美しさ」だ。連続したタンブリングでも、スワンでもとにかく美しい。凜と芯の通った美しさがあるのだ。このラインの美しさは、タンブリング以外の動きにも垣間見える。静止するときの、手足の伸びがとてもいい。



徒手の美しさ、たしかさは、井原の伝統とも言えるだろうが、手具の動きも速く、全方位型の選手に成長してくれそうな期待大だ。

今回の演技は、ミスもあり、本人にとっては苦い思いも残ったかもしれないが、全日本デビューだ。ここから年々上がってくる姿をずっと見守ることができる幸運に感謝、だ。

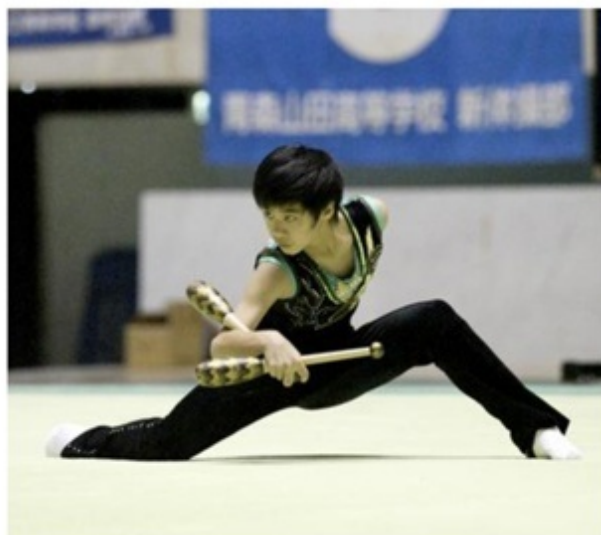
<撮影:小林隆子>

オールジャパン 2010 レポート③ 五十川航汰 (NPOぎふ新体操クラブ)

「哀愁」

まだ15歳の少年に「哀愁」ってどうよ？とは思うのだが、五十川航汰にはどうしてもその言葉が似合ってしまう気がする。とてもイケメンくんだと思うのだが、そのイケメンっぷりが決して「チャライ」ほうにいかず、なんだか物哀しげな雰囲気をもっているのが、演技者としての彼の魅力かと思う。まだジュニア。「かっこいい！ かわいい！」だけでも十分な年齢のだが、彼はその物憂げな印象ゆえに、華奢な体にもかかわらず、演技の端々でシニアのような風格を感じさせるのだ。

もちろん、五十川が大人っぽく見えるのは、容姿のせいだけではない。手具操作が巧みで、タンブリングもうまい。おそらく年齢のわりに「できること」が多彩なのだろう。まだ実施でミスが出ることはあるが、演技の内容がシニアにもひけをとらない、ように感じるのだ。そのよさは、とくにクラブの演技で見えた。じつに多彩で大人っぽい。



リングやロープは、まだ「つめこんでいない」演技で、演じていてゆとりさえ見える気がする。そして、その分、彼のポテンシャルの高さを感じられ、これからの期待がふくらむ演技だったように思う。

今、彼はことさらに「こう見せよう」「こう演じよう」と意識して、この憂いある雰囲気を出しているわけではないように見える。これから、もっと自分の「見え方」を意識して、その強みを意識した演技をするようになれば…かなり末恐ろしい存在になりそうだ。

<撮影:小林隆子>

【撮影協力】

※小林隆子(こばやしただかこ)

⇒AJPS(日本スポーツプレス協会)会員のカメラマン。『DDD』『クララ』『スポーツナビ』などで活動するとともに、自ら運営する Web サイト『Figgy』では、感性豊かな新体操の写真を公開している。

※神原 嘉徳(さかきばらよしのり)

⇒1985年よりスポーツ写真を始める。さまざまなジャンルを撮っていたが、体操関係の役員様と出会い新体操、器械体操中心になっていく。現在、スポーツナビ、ジュニア体操連盟での撮影を担当。感動をいかに伝えられるかをモットーに撮影に向き合っている。ご意見、ご感想、撮影依頼などは⇒ fwkh3915@mb.infoweb.ne.jp まで。

※大塚 達也(おおつかたつや)

⇒普段は実直な勤め人。しかし、週末になると新体操の撮影に情熱を傾けるアマチュアカメラマン。

男子新体操に恋してる！（BOYS2010・下）

<http://p.booklog.jp/book/52308>

著者：rgkeikos

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rgkeikos/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/52308>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/52308>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ